

第一節 弥生時代の成立と地域社会

一 弥生時代の始まり

弥生時代とは、水稻栽培を中心とした農耕の開始により、集団作業による計画的な食糧の確保とともに、長期にわたる食糧保存が可能になり、それに伴い人々の定住生活が本格的に始まった時代である。

弥生時代以前、永く続いた旧石器時代から縄文時代にかけて、食糧の確保は自然の植物、果実などの採取を主に、魚介類や狩猟による動物の獲得によるもので、自然環境に大きく依存した暮らしであった。

縄文時代には中部山岳地域から関東、東北地域などにかけて、堅果類や貝類など豊かな自然の恵みを受け、また「縄文農耕」と言われるような植物栽培が行われ、長期にわたって存続する集落が形成された地域がある一方、集落の形成という点では西日本は相対的に見て貧弱な様相を呈しており、その背景にある自然環境に差が見られるが、玄界灘周辺の地域で始まった水田農耕の開始は、それまでの人々の暮らしと地域の様相を根本から塗り替えるものとなった。

米栽培には水稻と陸稻があり、その両者が農耕の開始時期に共存しながら、それぞれの発展を遂げて行く。灌漑工事が難しい山間部や斜面地においては陸稻あるいはムギ・ソバを含む雑穀が栽培されるが、陸稻はその生産性とともに連作障害を引き起こすという欠陥を持ち、また併せて縄文時代以来の植物採取や狩猟などが引き継がれていく。

一方、水稻耕作は主に低湿地帯とその周辺部に始まり、それに必要な水運び入れる水路の造成工事などが必要不可欠であり、そのため集団による大規模な共同作業が必要となった。この共同作業とその集団形成こそが、弥生時代における社会形成の原動力であり、一方、土地に強く結びついた農耕民と指導者たちの出現を促した。

弥生時代は、縄文時代の小集団を単位とする部族社会から、稲作農耕によって定住化が進み、「クニ」と呼ばれる初期国家への胎動期と位置づけられ、後の古墳時代につながる国家形成までの過渡期に当たる。

弥生時代の概念については、これまで水稻耕作の開始と金属器の使用が始まった時代とされ、その起源については紀元前三世紀〜紀元後三世紀のおおよそ六〇〇年間と永く考えられてきたが、昭和五十年代に福岡市の板付遺跡、唐津市の菜畑遺跡で、今から二五〇〇年前とされる縄文時代晩期の山の寺式土器（長崎県南島原市深江町に所在する山の寺遺跡から出土し、長崎県地域を中心として縄文時代晩期の標識となる土器）とともに水田跡が発見されると、それまで縄文時代晩期とされてきた山の寺式期まで弥生時代の始まりが遡ることが分かってきた。ここでは、灌漑施設を伴って区画された水田のほか、石製・木製の農具だけでなく、ムギ・アズキなどの栽培植物、動物の骨なども見つかり、水稻耕作とともに畑作、家畜などが行われ、半ば完成された水田農耕社会が成立していた。

もちろん、こうした社会が一夕にしてできたわけではなく、そこには一定の期間と多くの指導者たちの存在を忘れてはならないのだが、その変化は急激で、僅かの間で北海道を除く日本列島各地に水稻農耕が広がった。その背景には、大陸及び朝鮮半島からの急激な人の移住を主たる原因とし、彼らをもたらした水稻を中心とする農耕技術の日本への移転が主な原因と考えられている。

ところで、日本には野生種が存在しなかったが、それでは稲作はどこからもたらされたのであろうか。稲作の伝来ルートについては、中国南部から南西諸島を経て北上した華南ルート、中国南部から東シナ海を越えて直接伝来した華中ルート、そして揚子江下流域から韓半島を経て南下した華北ルート、以上の三つが主なルートと考えられている。考古学の立場からは、イネの植物学的特徴や水稻耕作に必要な石器類、鉄器類、土器類の特徴などから、韓半島から伝来したことは共通認識になっている。ただ、どのような経緯で日本に伝来したのかを巡っては変遷があった。当初は、中国の戦国時代の燕の韓半島進出により、圧迫された韓半島の移民が日本に移住した、とする説が有力であった。しかし、韓半島での調査事例の増加や、九州北部での韓半島との関連を示唆する調査事例の蓄積により、韓半島無文土器時代中期（青銅器時代後期）

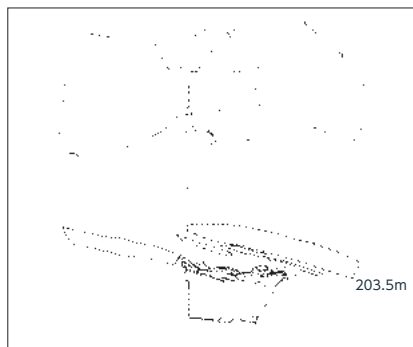


図3-1 風観岳28号支石墓



写真3-1 風観岳支石墓群F地点

(図3-1、写真3-1 諫早市教育委員会 諫早市文化財調査報告書第19集より)

の松菊里文化の影響が日本に及んで弥生時代が始まった可能性が高まった。松菊里文化には水稲耕作を示す証拠や環濠集落などが見つかっており、韓半島での農耕社会の成立と発展により、膨張した人口の一部が北部九州に移住し、水稲耕作技術及びそれと関連する道具、土木技術、価値観などを文化融合としてもたらしたことが、弥生時代開始の契機となった可能性が説かれている。このことは、最近学会をにぎわしているAMS炭素十四年代測定による実年代の見直しの議論とも関連するテーマであり、しばらく議論は続くであろう。

一方、後代に書かれた魏志倭人伝のルートといわれる対馬、壱岐には、稲作が伝わった頃の朝鮮半島南部の墓制として知られる支石墓(写真3-1、図3-1)は発見されていない。支石墓は五島列島の最北にある宇久島に存在し、特に西北九州に多く分布することから、朝鮮半島南部及び九州島から五島列島を経由して西北九州や北部九州に伝播し広がったのではとの考えもある。この場合、板付遺跡や菜畑遺跡などでは支石墓が発見されておらず、後世に破壊された可能性も否定はできないが、注意しなければならないことは、朝鮮半島の南部と北部の文化がそもそも一様ではなく、地域によって墓制などに違いがあり支石墓に限定して文化伝播を考えるのは危険である。また朝鮮半島からの文化伝播を一元的に捉えることにも注意が必要で、半島の各所からの伝播を多面的なものとして捉え、時期的にも幅を持って考えることが必要であろう。

更に注意をしなければならないことは、弥生時代が水稲農耕一辺倒の社会ではないといつことである。水稲農耕の開始により、村の単位は大きくなり、灌漑事業

などによって村と村の協力関係も強くなってきた。しかし、全ての人々が水稲農耕に移行したわけではなく、水が引けない場所では畑作が行われ、様々な農作物が栽培される一方、堅果の採集や狩猟など、前時代から引き継がれた食糧獲得も行われた。また、漁業を中心に生計を立てる者、土器作りなどを主にする者、金属器の生産に従事する者、このほか流通に関わる集団も生まれた。これらは完全に分離しているわけではなく、複合しながら存在したと考えた方が良さだろう。

弥生時代とは、水稲農耕を中心とする食糧生産を背景に様々な生業が生まれた時期であり、富の集積とその再配分を巡って身分の格差が生じ、後に続く日本文化の原型が出来上がっていく時代である。

特に、私たちが暮らす長崎県地方は、山が海岸近くまで迫り、水田を開くことが出来る平地は限られており、陸の視点から見れば、これまで生産力の乏しい辺境の地と見られることが多かった。しかし海に目を転ずれば、交易・交流を中心に生きてきたこの地域のあり方が複数の遺跡の様相から見えてくる。

二 弥生時代の年代と時期区分

水稲農耕の伝わった年代は、これまで土器型式から今から二五〇〇年前頃と考えられていたが、近年、国立歴史民俗博物館が行った当該時期の土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定では、更に古い紀元前十世紀との結果も出ており、弥生時代の始まりの実年代が議論になっている。

従来の年代観は、出土する土器型式を規準としたもので相対的な年代であり、これに対して放射性炭素による年代は絶対年代である。年代の一致には、まだ相当の時間がかかるものと考えられ、異なる年代観を基に、中国のどの王朝の時に日本に影響を及ぼす事態が起きたのかを言及するには、なお尚早の観があるので、先に述べたように縄文時代晩期の山の寺式期から弥生早期と捉え、その始まりは板付遺跡や菜畑遺跡で示されている二五〇〇年前頃としておきたい。その後、これまで弥生時代の時期区分とされてきた前期、中期、後期を加えた四つの時期に区分し、各時期の特徴は後述する。

◆ 初期農耕と環大村湾地域

大村湾岸一帯の弥生時代遺跡が注目され始めたのは、大村市の黒丸遺跡で昭和五十二年以降に本格的な調査が始まってからである。遺跡の広がる黒丸町、沖田町一帯は郡川河口左岸の低湿地帯を取り囲むように広がり、大村湾沿岸最大の水田地帯となっている。調査により縄文時代晩期黒川期の甕棺墓が発見

されるとともに、一般に根菜類の採取に使われたと考えられる土掘り具としての扁平打製石斧が大量に発見された(↓)。

その後の調査で、縄文時代晩期晩期から弥生時代早期の過渡期にかけての遺物とともに、湿地帯で使用されたと思われる木製の運搬具(写真3-2)が出土し、更に弥生時代早期に遡る可能性を持つ擦切り技法によって穴の開けられた石包丁など大陸系磨製石器(写真3-3)の出土により、初期農耕地としての先進性をうかがうことができる。遺跡は範囲確認のための調査や開発に伴う調査が進められているが、弥生時代の早期から終末までの遺物が出土し、この地域一帯で最も注目される遺跡である。

また大村市と諫早市の境の山間地にある弥生時代早期の風観岳支石墓群は、朝鮮半島南部地域の影響を強く受けた墓制と考えられており、これまでの調査で集落跡は確認されていないが、付近には水田を営める場所はなく、陸稻など畑作を中心とした集団の墓地であろうと考えられている。

このように、大村湾を取り巻く地域は、大陸文化の影響を強く受けて初期農耕が成立していたことをうかがわせる遺跡が存在する。



写真3-2 黒丸遺跡出土舟状木製品

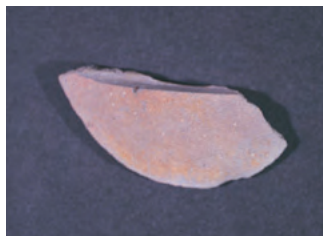


写真3-3 大陸系磨製石器 黒丸遺跡出土擦切り石包丁

(写真3-2・3 大村市教育委員会
大村市文化財調査書第20集より)

四 水上交通の発達と文化伝播

大村湾沿岸及び長崎県地方の文化とその伝播を考える時、水上交通の発達を抜きに考えることはできない。そのことを明確に示したのが富の原遺跡である。海岸部近くに成立した遺跡は、弥生時代中期初頭から形成され始め、後期前半期まで続く大集落で、集落の周りに環濠を巡らせた環濠集落でもある。

特に、石棺墓と甕棺墓という異なる墓制が共存することを証明した遺跡として知られるが、北部九州で製作され持ち込まれたと考えられる珍しい鉄戈や鉄剣が、北部九州系の成人甕棺墓に副葬されていたことなど、この地域では特異な集落として注目される。土器に関しても、環有明海地域の土器に類縁が求められる在地系の特徴を持つ台付甕土器群と、北部九州系の須玖式と呼ばれる平底形土器群、更には玄界灘沿岸の糸島市を中心とする糸島型と呼ばれる祭祀用丹塗土器が共存するなど、遠隔地との頻繁な交易・交流があったことを物語っている。特に、三本の鉄戈と一本の鉄剣の出土は、北部九州の遺跡でもこれだけの数が一カ所で出土した例はなく、遺跡の成立背景には北部九州地域のクニとの密接な関係を思わせる。

その遺跡が後期前半を境に忽然として姿を失くしている。そのことからまた、遺跡の成立背景の特殊性をうかがうことができ、大村湾一円が縄文時代の末期から弥生時代早期に大陸文化の影響を受けて成立し、その後北部九州地域と密接な関係を築きつつ発展していく集落も生まれた状況を見て取ることができる。それを支えたのは水上交通であり、様々な地域の文化が行き交うクロスロードとしての大村湾地域の性格が浮かび上がる。

以下では、大村湾一円とそれにつながる佐世保市を中心として北部九州文化圏に係る遺跡、更に諫早市、島原半島を中心として環有明海文化圏に係る遺跡を視野において、大村地方における弥生時代の変遷を見ていきたい。

註

(1) 黒丸遺跡調査会『黒丸遺跡』長崎県大村市黒丸町所在黒丸遺跡の調査報告 一九八〇

都市下水路工事中に、田中正央によって発見され、大村市では初の本格的な発掘調査となった。

第二節 環大村湾を取り巻く一帯の主要遺跡

時代ごとの解説の前提として、主要遺跡の内容とその様子について触れておこう。(写真3-4)

一 大村湾沿岸地域の遺跡

■ 一・黒丸遺跡(弥生早期～終末)

遺跡が発見されたのは昭和五十二年で、大村扇状地形の調査中であった田中正央(日本大学農獣医学科講師・当時)が、下水道工事現場の断面で先史時代遺物を発見されたのが契機となり、以来、開発に伴うものや範囲確認のための調査が続けられている。

従来、この地域には「九ノ坪」「蔵ノ町」などの小字地名が残り、田及び道による整然とした形の区画がなされていることが指摘され、古代～中世の条里跡の存在が注目されていた(1)。

遺跡は郡川河口近く左岸の低湿地帯を取り巻くように広がっている。縄文時代晩期終末の黒川期から本格的な定着が始まるようで、続く弥生時代早期から古墳時代、中世、近世まで続く大村湾最大の拠点集落である。



写真3-4 大村湾周辺の主要弥生時代遺跡

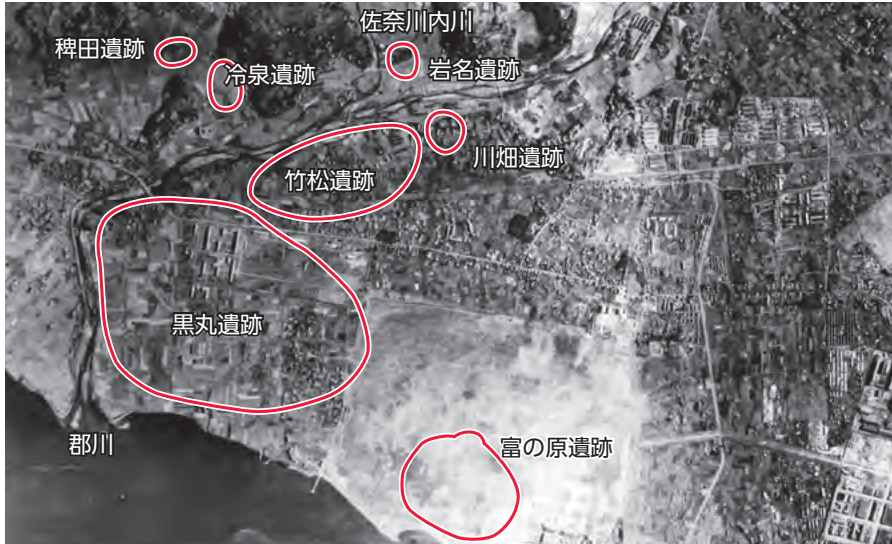


写真3-5 大村扇状地と主要弥生時代遺跡

この時代の特徴的な遺物として、土掘り具と考えられる扁平打製石斧が多量に出土している。石材はこの地域で産出する比較的柔らかい安山岩を使用し、その多くが折れた状態で出土する。刃先に付いた使用痕は刃の両側に付き、対象物に対して直角に近い形であたっていることから、棒の先に石斧を取り付け、土を起すための土掘り具と考えられている。また、黒曜石や良質で硬い安山岩を素材とした石鏃^{せきぞく}などの石器や、大村市対岸の西彼杵半島で産出される結晶片岩を利用した漁具としての石錘^{せきづち}が多く出土することから、初期農耕の可能性とともに舟を利用した往来と漁労、また狩猟・採取が行われていたことが分かる(写真3-5、図3-2)。

()で注目される遺物に舟状木製品と呼ばれているものがある。出土地点は河口に近い低湿地帯で、その大きさや形態から低湿地で人の移動と物の運搬に使用する潟スキーのような機能を持つものではないかと考えられるが、国内では類例の出土がない。周辺から出土する土器は縄文時代晚期から弥生時代早期の過渡期に当たるものであり、初期水稻耕作に関連する遺物である可能性を捨て切れず、今後の類例の増加を待ちたい。

遺跡の低湿地部では、小河川流域からは弥生時代早期のドンダリの貯蔵穴が二基発見され、これだけの数が一カ所で発見さ

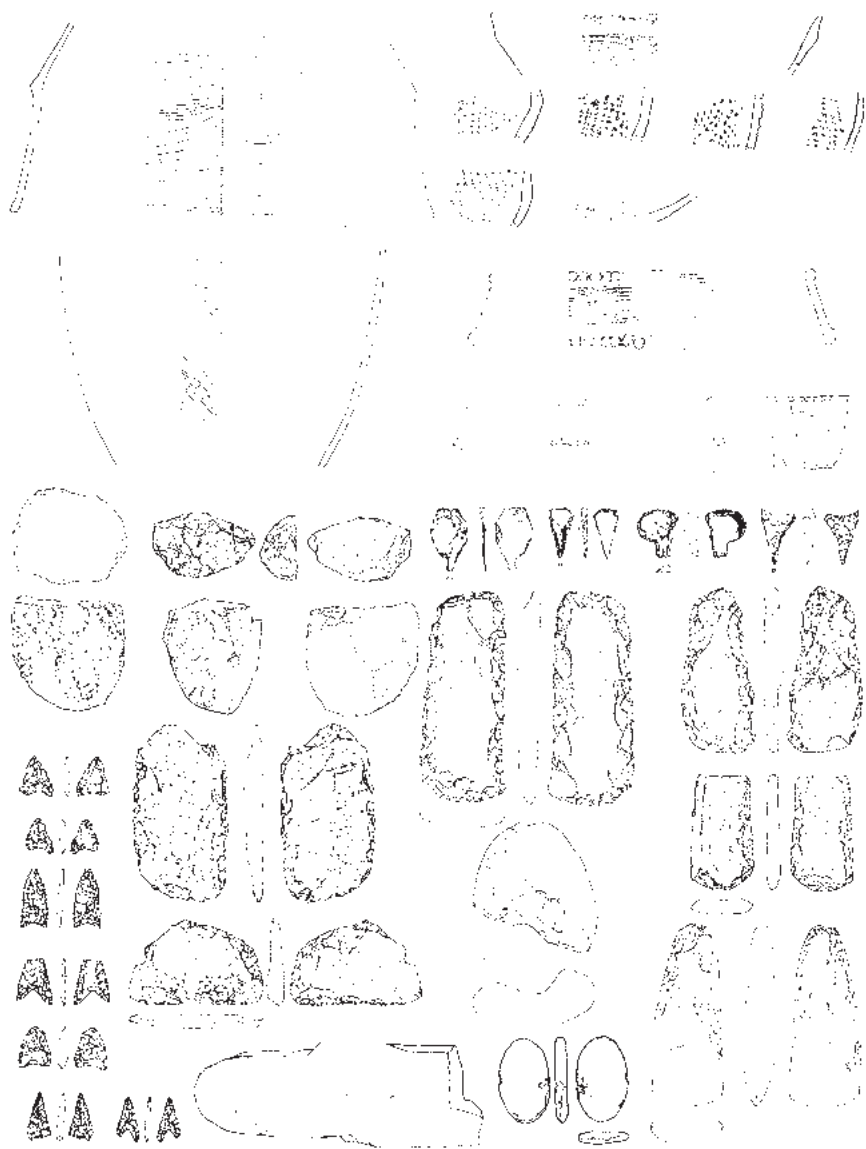


図3-2 黒丸遺跡出土縄文晩期～弥生早期の土器と石器

(黒丸遺跡調査会「黒丸遺跡」より)

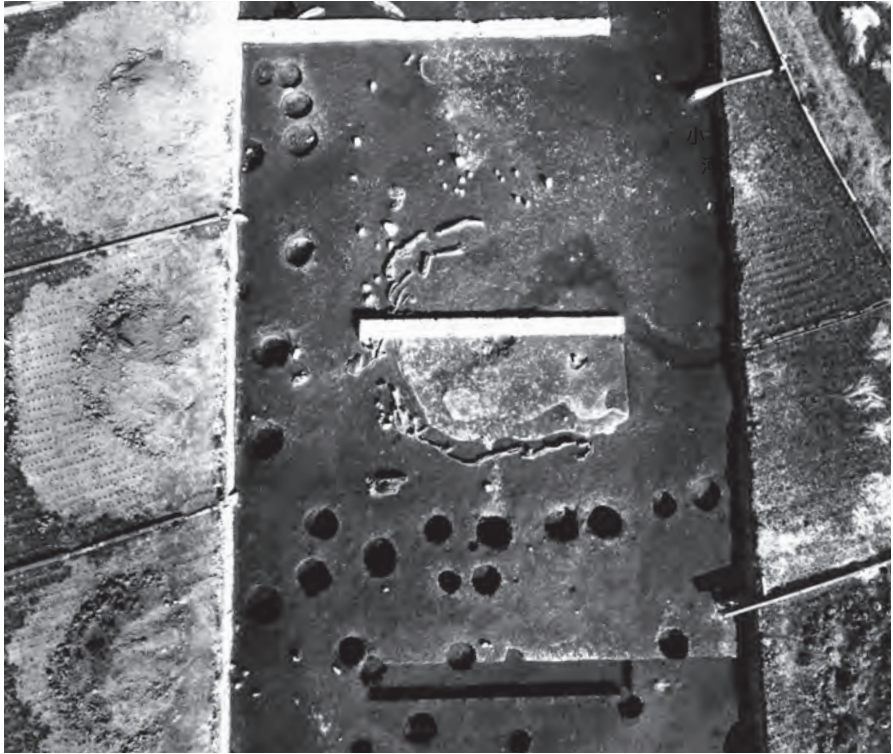


写真3-6 空から見た黒丸遺跡のドングリ貯蔵穴群

(長崎県教育委員会提供)

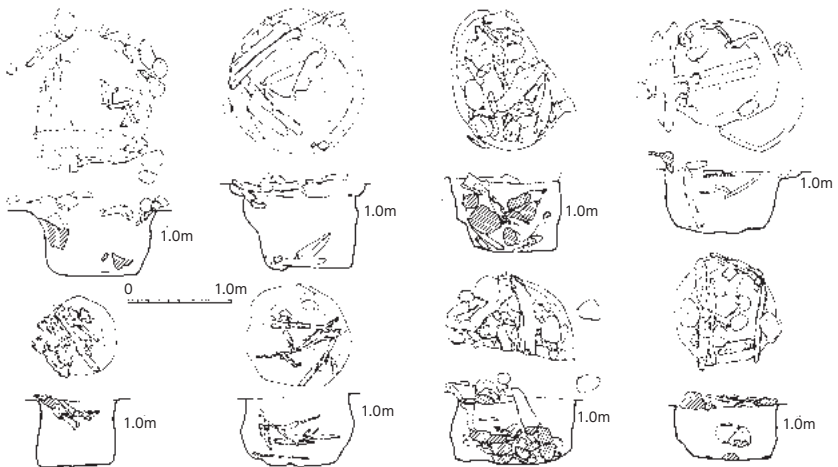


図3-3 黒丸遺跡出土ドングリ貯蔵穴

(長崎県教育委員会 長崎県文化財調査報告書第132集より)



写真3-7 黒丸遺跡沖田地区矢板列



写真3-9 鋤先出土状況



写真3-8 鋤柄出土状況

(写真3-7～10 大村市教育委員会大村市文化財調査報告書第25集より)



写真3-10 膝柄出土状況

れたのは全国的に例を見ない(写真3-6、図3-3)。

このように、黒丸遺跡は水稲耕作の始まる初期の遺跡として、極めて重要な情報を有している。

更に、弥生時代早期から前期後半期と、発掘状況から少々時間幅をもって考えられている大陸系磨製石器の石包丁と抉りのある柱状石斧が注目される。特に石包丁は擦切り技法という国内では珍しい穴の開け方で、同様のものは朝鮮半島で多く見られる。佐賀県唐津市の菜畑遺跡や長崎県南島原市の原山遺跡などから見つかっている。

水田に関連しそうな遺構としては、弥生中期の矢板列が発見され(写真3-7)、水田農耕に関連する施設と考えられている。また、たてこぎ 堅杵、鋤(写真3-8)、かき 写真3-9、膝柄(写真3-10)、弓、ヤスのほか丸木舟の舟形模型が出土している。農耕に関する木製品のほか、舟形模型は河海に対する祭祀具と考えられている。

残念ながら弥生早期、前期の水田遺構の発見には至っておらず、初期の水稲農耕の実態がどのようなものであったか今後の調査の行方が期待される。

■二、富の原遺跡（大村市富の原二丁目） 弥生時代中期頭～後期前半）②

昭和五十五年（一九八〇）に弥生時代中期末の成人甕棺墓が工事中に偶然発見され、中から副葬品として鉄戈^{てつご}が出土した。従来、この一帯は長崎県遺跡地図で「飛行場古墳群」と呼ばれていた。大正十二年（一九二三）に設置され、昭和十二年に大拡張された海軍航空隊の建設ですべて失われたと考えられていた。古老の話を総合すると建設時に出てきたのは弥生時代の石棺墓で、古墳時代の高塚古墳ではなかった。

遺跡周辺は扇状地の末端で、扇状地の特性として地下には郡川によって運ばれてきた円礫層が厚く堆積し、そのため水がしみこみ易く、周辺には表面を流れる川がない。海岸部近くの湧水を使って僅かに水田が営まれる程度である。航空隊建設以前は海岸部の水田周辺に小集落があり小さな港があった。

鉄製武器の出土

鉄戈は、その出土分布を見ると、弥生文化の先進地帯である北部九州文化圏の福岡県、佐賀県に集中し二三例が知られていたが、長崎県本土部での発見は初めてであった。鉄戈は武器としてより権力者の象徴としての性格が強く、北部九州と深いつながりがあったことをうかがわせた（写真3-11、図3-4）。

昭和五十六年から昭和六十一年にかけて、大村市が調査委員会を組織して遺跡の範囲確認調査を実施し、弥生時代の大きな墓地群が二カ所発見され、結果として双方の墓地から合わせて鉄戈三本、鉄剣一本が成人甕棺墓の副葬品として出土した（写真3-12）。北部九州の大遺跡でも、鉄戈、鉄剣合わせて四本出土した事例はなく、富の原遺跡の集落としての特異性をうかがわせる。また甕棺墓の周囲には多くの石棺



写真3-11 富の原遺跡出土鉄戈・鉄剣

（大村市教育委員会 大村市文化財調査報告書第12集より）

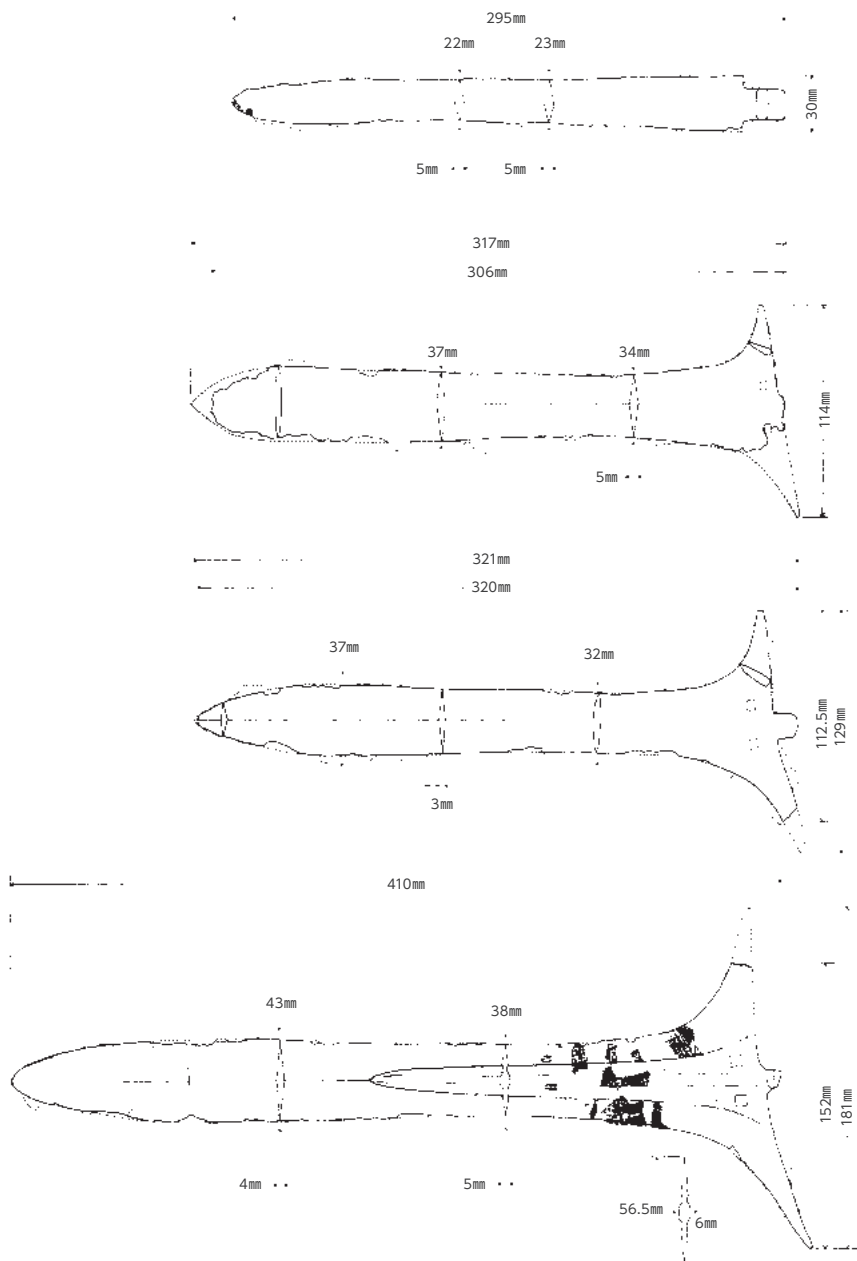


図3-4 富の原遺跡出土鉄戈・鉄剣

(大村市教育委員会 大村市文化財調査報告書第12集より)



写真3-12 K-20人骨と鉄剣

(大村市教育委員会 大村市文化財調査報告書第12集より)

二つの墓域と異なる墓制の共存(石棺墓と甕棺墓)

墓が分布し、調査当初から甕棺墓との共存関係が大きな問題となった。

北部九州では、異なる形態の墓地が集団内では共存することはないとされており、当初、調査指導委員会では石棺の長さが一辺前後と短く、その形態から弥生時代早期の支石墓下部の石棺と考えられた。長崎県地方では、弥生時代の石棺墓の存在は古くから知られており、それに小児甕棺墓が共存する事例は知られていたが、成人甕棺墓が共存する事例はなかった。つまり、異なる墓制は共存しないという考え方があった。しかし、調査では成人甕棺墓と石棺墓に明らかな切り合い関係がなく、それぞれの墓地には何らかの地上標識があったことをうかがわせた。また周辺からは弥生時代早期の遺物が出土せず、それぞれの墓地の分布

範囲も同じであることから、両者は共存するのではないかと疑いがあった。平成四年の調査で、石棺墓の中から供献された弥生土器が発見されたことから、その共存関係が確かめられるとともに、その特異なあり方が学会でも注目されることとなった(3)。

また、甕棺墓の中には表面を黒く塗った「黒塗りの甕棺」があり注目される(写真3-13)。すべての甕棺に認められるわけではなく、また副葬品を持っているとは限らないので、どのような基準があるのか分からないが、佐賀県の吉野ヶ里遺跡では階層の差があるのではないかとされている。甕棺を黒く塗る風習は、既に福岡県や佐賀県の遺跡で認めら



写真3-13 黒塗り甕棺

(大村市教育委員会
大村市文化財調査報告書第12集より)

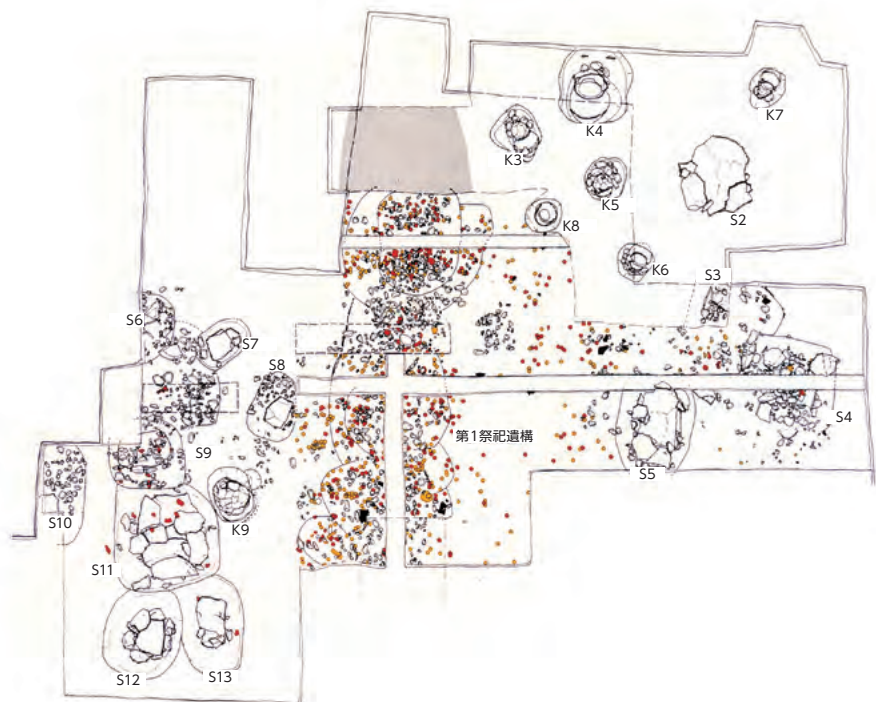


図3-5 富の原遺跡A地点墓地と祭祀遺構

(大村市教育委員会 大村市文化財調査報告書第12集より)

れており、そうしたことが富の原遺跡でも認められることは、常に北部九州の情報が伝わっていることを示している。

墓地の構造に関しては、特にA地点とした墓地では、「教基から一〇基を超えない程度の墓地の集中」が明らかになり、類縁関係を持つ単位集団の墓地形成が見られると考えられた(図3-5)。しかし、その後B地点墓地の二〇号成人甕棺墓から成人男性一、成人女性二分分の人骨が出土し、調査を行った長崎大学解剖学第二教室の松下孝幸助教(当時)等によれば、三体の合葬は物理的に不可能といわれ、改葬、追葬のいずれかが考えられた。甕棺墓で二体以上の人骨が見つかった事例は唐津市の大友遺跡にもあり、富の原遺跡の葬送においても存在したことからよって、一棺一葬という既成の概念が崩れ、対馬・志岐を除く長崎県地域の墓制研究そのものの再検討を迫ることとなった。

A地点墓地は中期末～後期初頭で存続期



写真3-16 A地点墓地石棺墓と甕棺墓



写真3-14 富の原遺跡A地点墓地祭祀遺構



写真3-17 A地点墓地石棺墓主体部



写真3-15 A地点墓地甕棺墓と石棺墓

(写真3-14～17 大村市教育委員会 大村市文化財調査報告書第12集より)

間は短く、B地点墓地は中期初頭から後期前半と長く、存続期間に違いが見られる。また、A、B両地点以外にも小規模な墓地群が見つかっており、今後の精査が望まれている。

祭祀遺構

A地点墓地では、祭祀遺構の存在が注目される(写真3-14)。遺構の内容にはA地点墓地とB地点墓地で違いが見られるが、出土する土器型式から時期的にはほぼ同時期と考えられる。この違いが何によるものかは今後の検証が待たれるが、A地点墓地では地面を浅く掘り、その中に円礫と破碎された丹塗土器が投げ込まれている(写真3-15)。

注意深く観察すると、A地点墓地では複数の祭祀土壙が重なり合いながら続いていることが確認された(写真3-16、3-17)。

恐らく複数回の行為によって形作られたもので、墓道と関係があるのか、またどこまで続いているのかは不明であるが、集団中での祭祀の場所を示すものとして注目される。

環濠集落

B地点墓地二〇号甕棺墓では、墓壙の上面に破砕された祭祀土器が確認されている。祭祀遺構としては、諫早市林の辻遺跡でも発見されており、ここでは角礫が使われている。祭祀の上で、石に何らかの意味があったものと思われる。

また、数本の環濠が巡らされた環濠集落であることが明らかになっている(写真3-18)。造られ機能を果たしたのは、弥生中期中頃以前から中期後半期で、数条が確認されている。遺跡が広大であることから、全容は明らかになっていないが、長崎県内では島原半島にある十園遺跡などが知られており、西北九州では数少ない環濠集落の一つである。

環濠は集落の周りに掘られ、敵からの防御のため、あるいは集落の内と外を区画するためのものと考えられており、環濠を持つ集落は地域の拠点と考えられる。特に、複数の鉄戈の存在から、北部九州地域と強い関係があったものと考えられる(図3-6)。

集落としては、弥生時代中期末～後期初頭の竪穴式住居跡数基(写真3-19、3-20)と、弥生中期の掘立柱の建物群が確認されている(写真3-21)。竪穴式住居は数十センチの深さを持つのが一般的だが、遺跡で確認されたものは確認面から五センチ内外の浅さで、確認できたのは幸いであった。墓地についても同じことが言え、畑の耕作土を二〇センチほど剥ぐとすぐに検出される。甕棺墓の多くは上部が破壊されており、また石棺墓も同じ状況であることから、恐ら



写真3-18 富の原遺跡B地点墓地と環濠

(大村市教育委員会提供)

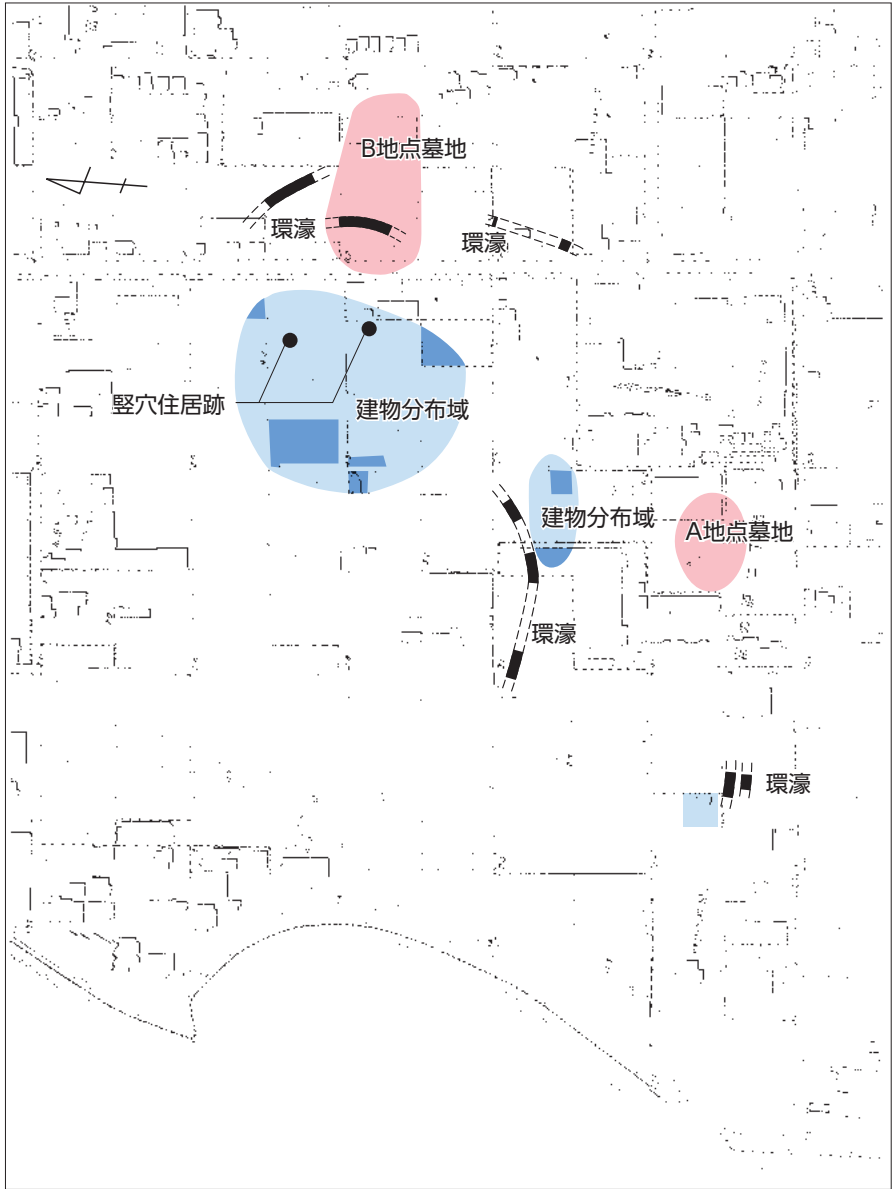


図3-6 富の原遺跡の集落・環濠・墓地



写真3-20 富の原遺跡2号住居跡



写真3-19 富の原遺跡1号住居跡

(写真3-19・20 大村市教育委員会 大村市文化財調査報告書第12集より)

く海軍航空隊建設で数十センチの土が削り取られているものと考えられる。

以上のことから、竪穴式住居跡は既に削平されたものが多く存在するものと思われる、今後の調査ではその柱穴跡の確認が重要となる。

その後に行われた調査結果と合わせて総合的に判断すると、富の原遺跡は弥生時代中期初頭から集落形成が始まり、その時から既に北部九州地域との活発な交流があった。また中期中頃に環濠が掘られ、集落としては中期末から後期初頭に鉄戈・鉄剣を所有する時期を迎え、後期前半に何らかの理由で消滅する大集落であったことが判明している。



写真3-21 富の原遺跡掘立柱建物群

(大村市教育委員会 大村市文化財調査報告書第21集より)

■三、岩名遺跡（大村市今富町 弥生時代後期）⁽⁴⁾

郡川と佐奈河内川の支流である野田川に挟まれた段丘上に、後期前半の成人甕棺墓が発見された。その後の調査で、同じく後期前半の小児甕棺墓が出土したが、生活跡を思わせる同時期の遺構は確認されていない^(図3-7)。

周辺には、弥生時代終末期の冷泉遺跡や、古墳時代に入って四世紀末～五世紀初め頃の首長墓である黄金山古墳などがあり、大村平野における中心的な一角を占めている。周辺には水田地帯が広がり、河岸段丘上であるため水害の危険性は少ないと思われる、小集落を営む絶好の場所となっている。消滅した富の原遺跡に後続するもので、北部九州地域の墓制の影響を受けているものとして注目される。

■四、冷泉遺跡（大村市今富町 弥生時代後期終末）⁽⁵⁾

郡川中流の右岸の平地で、周辺には竹松遺跡、岩名遺跡、黄金山古墳など弥生時代後期から古墳時代にかけての多くの遺跡が点在する。

冷泉という地名は中世に存在した冷泉寺という寺の名から来ている。周辺一帯には中世の寺院群が多く所在し、また中世大村家の居城といわれる今富城があるなど、原始・古代・中世における大村の中心的な場所である。

遺跡確認調査で、円形竪穴式住居跡一基と方形竪穴式住居跡五基が出土した。また石棺墓三基、配石墓三基が出土している。六号住居跡からは床面から多くの遺物が良好な状態で出土し、報告書では「古式土師器を伴う土器群の最古段階に位置づけられる」とし、弥生時代終末から古墳時代初頭の遺跡と位置づけられている。次章で詳しく触れる。

石棺墓は長軸が一八〇センチメートルを超えるものがあり、伸展葬による石棺墓と考えられる。また配石墓の主体は木棺で、木棺

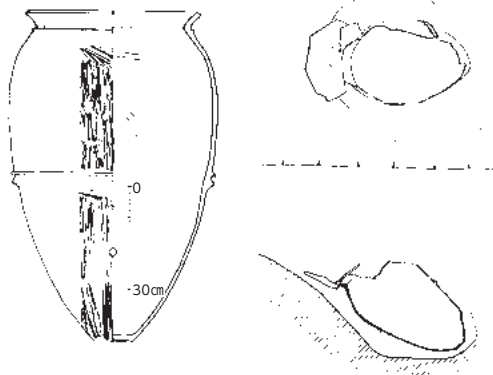


図3-7 岩名遺跡出土甕棺

(大村市教育委員会 大村市文化財調査報告書第12集より)



图3-8 冷泉遺跡6号住居跡出土土器(上)、5号配石墓(右下)、3号石棺墓及び出土鏡・刀子(左下)
 (大村市教育委員会 大村市文化財調査報告書第25集より)

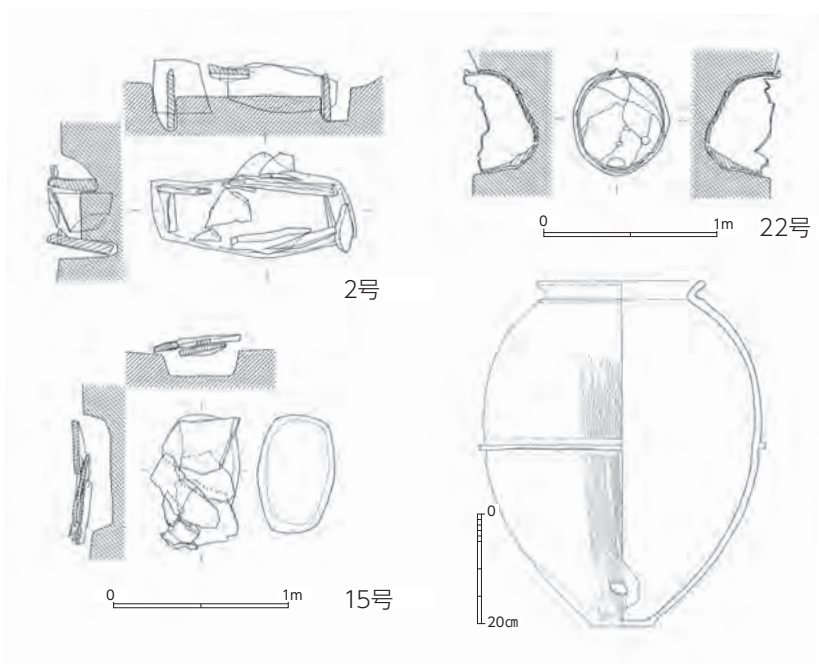


図3-9 白井川遺跡出土石棺墓(左上)・石蓋土壙墓(左下)・甕棺墓と甕棺

(東彼杵町教育委員会 東彼杵町文化財調査報告書第4集より)

配石墓といったほうが良いかもしれない。時的には同時期ではないかと考えられているが、今後の類例の増加が待たれる。

三号石棺墓付近からは破鏡と考えられる舶載鏡片が出土しており、拠点的な集落と考えられる**図3-8**。

■五、白井川遺跡(東彼杵町)⑥

遺跡は彼杵川下流域の水田地帯で、大村湾を間近に臨む標高約四〜七メートルの低地に広がっている。海岸近くには、五世紀前半期の築造とされる大村湾沿岸地域では最大のひさご塚古墳を中心に、一帯には数多くの古墳群があることが知られている。また、中世の輸入陶磁器も数多く出土していることから海上交通による拠点的な遺跡という性格が見られる。黒丸遺跡と同じように、縄文時代晩期の土器とともに多くの扁平打製石斧や黒曜石製の石器が出土している。

遺跡からは、弥生時代の箱式石棺墓、石蓋土壙墓、甕棺墓及び竪穴式住居跡が検出

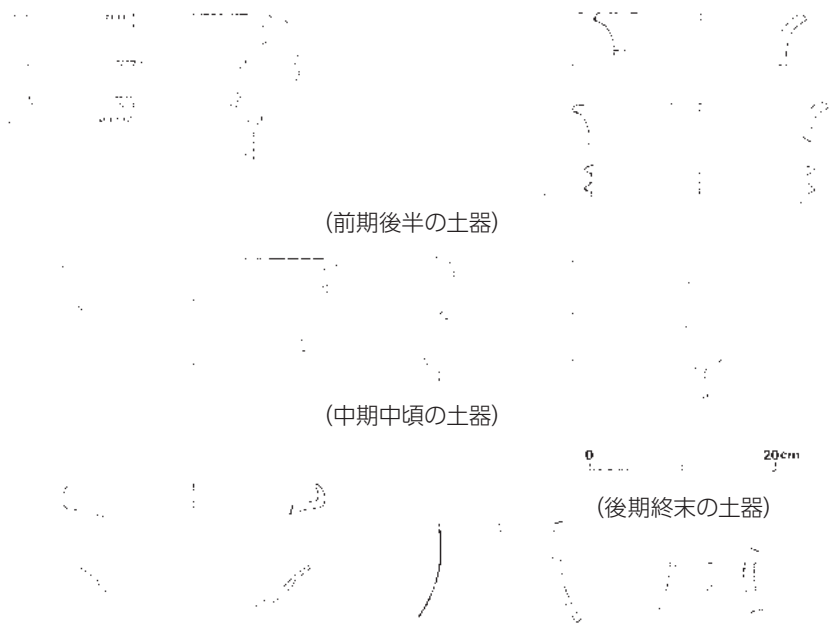


図3-10 稗田遺跡出土土器

(稗田遺跡調査会 『稗田遺跡 弥勒寺地区農業構造改善事業にかかる遺跡の発掘調査報告書』より)

されている。甕棺は後期初頭の特徴を持ち、また箱式石棺(図3-9)はその大きさが1メートル前後で富の原遺跡の例とほぼ同じ傾向を持ち、周辺の出土遺物から时期的には中期末から後期前半。石蓋土壙墓に関しては箱式石棺墓と分布が重なり、同時期ではないかと考えられている。

一 竖穴式住居跡は、その出土遺物から後期後半以降のもので、墓地との関連性は薄い。

このほか、弥生後期の包含層中から方格規矩鏡きくきょうの破片が出土している。遺構に伴って発見されたものではないが、県内でも数少ない出土例で、遺跡が拠点集落であったことをうかがわせる。

■六 稗田遺跡②

遺跡は大村扇状地の北側で多良山麓の末端部にあり、一帯の水田が圃場整備されることから昭和六十一～六十二年にかけて調査が行われた。

遺跡のすぐ前は低湿地帯で水田が広がり、

周辺には岩名遺跡、黄金山古墳、古代から中世にかけて栄えた寺院群、今富城などがある。古代官道も近くを通り、海上交通、陸上交通の交わるところで、大村地方で最も早く開かれた場所の一つである。

遺跡からは縄文時代晩期の土器片が僅かながら出土し、弥生時代前期後半に最初のピークが現れ中期中頃まで続く。中期後半から後期にかけての土器はほとんど発見されておらず、何らかの事情により、丘陵内での未調査区への移動か、丘陵外への移動が行われた可能性が指摘されている。弥生時代終末期になると再び生活の場として利用される。

古墳時代になると布留式と呼ばれる四〜五世紀頃の土器を出土する住居が営まれ、中世や近世の遺構、遺物も発見されることから、生産地を背景に息の長い集落が営まれている。

弥生時代と考えられる円形竪穴式住居跡が二棟あり、いずれも後代の古墳時代に作られた竪穴式住居によって大半が削られている。

周辺からは、弥生前期後半期の北部九州系の板付Ⅱ式土器や刻目突帯文土器、続いて弥生時代中期の土器が出土する。その後、末期の土器が出土している(図3-10)。

■七. 化屋大島遺跡(8)

大村湾南端の化屋大島にあった石棺墓群で、現在遺跡は団地造成に伴って削り取られ存在しない。昭和三十八年(一九六三)、農作業中に石棺墓が発見され、一号石棺墓の主体部内から、供献された中期初頭の壺型土器が出土した。その後、昭和四十八年(一九七三)の宅地造成に伴い発掘調査が行われ、合わせて七基の石棺墓が検出された。

島に存在する墓地としては、佐世保市の宮の本遺跡と共通するものがあり、大村湾を巡る水上交通に重きを置く集団の墓と考えられるが、供献土器の存在から、弥生時代中期初頭と分かる貴重な石棺墓群である(図3-11)。

諫早地域の遺跡

一・林の辻遺跡(9)

諫早市街を見下ろす標高約四〇位の丘陵上にあり、弥生時代中期中頃から中期後半にかけての甕棺墓が三基発見された(図3-12)。いずれも大きさから小児に属する甕棺墓であろうと考えられる。

ここで注目されるものに祭祀遺構がある。時期的には中期前半から中頃とされており、発見されている甕棺墓の時期とは微妙に異なるが、「近傍に対象遺構が存在するものと考えられる」としている。形態は異なるものの、富の原遺跡の祭祀遺構に通じるものがある。富の原遺跡の場合には、「遺跡周辺に普通にある扇状地形成過程の円礫を用いること。また丹塗祭祀土器を用いるのに対し、林の辻遺跡では角礫が用いられるのは立地環境の差と見られるが、丹塗祭祀土器は見られないという点に大きな差が認められ、これが単なる立地や地域差なのかは今後の課題となろう。」

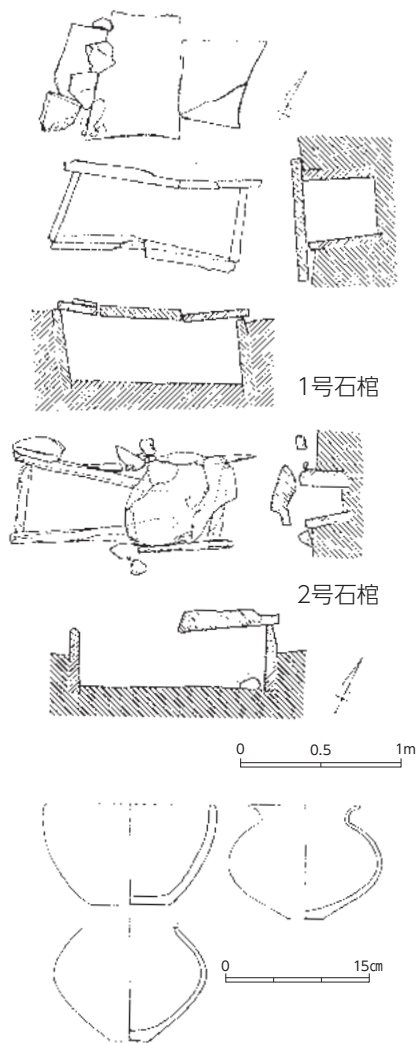


図3-11 化屋大島遺跡の石棺と出土土器
(多良見町教育委員会「多良見町郷土誌」より)

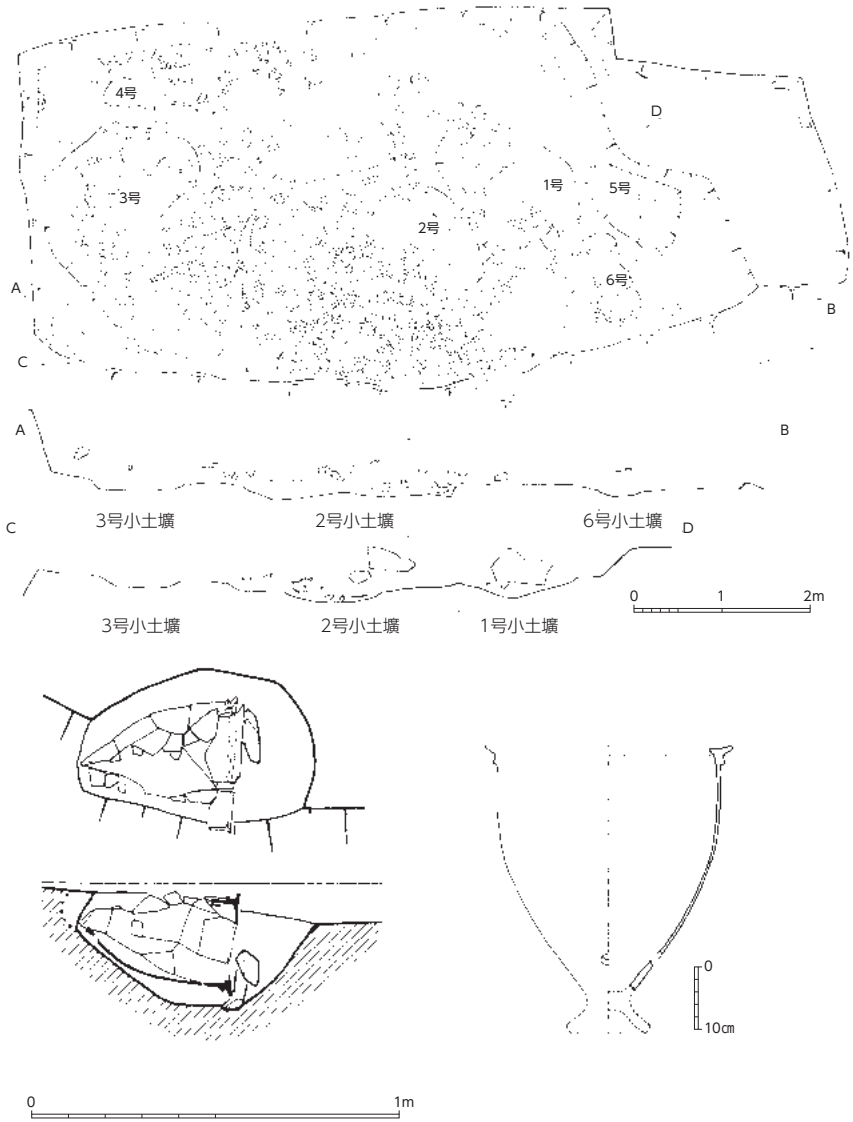


図3-12 林の辻遺跡の祭祀遺構と小児甕棺墓

(諫早市教育委員会 諫早市文化財調査報告書第4集より)

■二・諫早農業高校遺跡⑩

遺跡が発見されたのは、明治三十九年（一九〇六）に諫早農業学校（現県立諫早農業高校）の校地造成で、その詳細は不明であるが、三二個の甕が出土し、その中の一つから出土したと伝えられる銅剣が特に注目される（[図3-13](#)）。

諫早農業高校は諫早の市街地近くにあり、船越、立石など古代関連地名の付く場所にある。

中世以降の干拓で当時の姿はほぼ失われているが、古代には鳥原鉄道本諫早駅近くの船越近くまで有明海が浅く入っており、一方で大村湾側からは東大川が入り、標高二五メートル程度の諫早地峡を越えれば僅か数キロメートルで大村湾に出ることができる。このように有明海と大村湾を結ぶ交通の要衝としても好位置にある。

青銅製武器に関しては鳥原市景華園遺跡⑪で複数の青銅製武器が巨石の下から出土しており（[写真3-22](#)）、北部九州地域の直射的影響を強く受けた遺跡として注目されているが、青銅製武器が最も権威の象徴と考えられていること、そして陸上交通と海上交通の重要な結節点であることを考え合わせた時、極めて注目される遺跡である。

■三 佐世保・相浦地域の遺跡

■一・宮の本遺跡⑫

佐世保市の南九十九島の中の一つ、高島と呼ばれる小島の四〇五メートルの砂丘上に形成された墓地遺跡で、

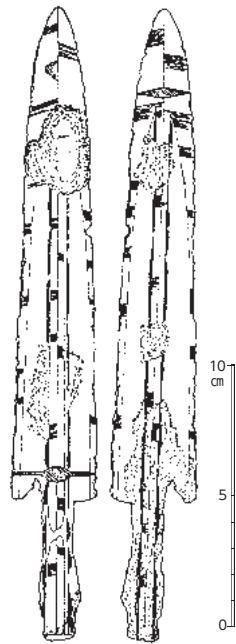


図3-13 諫早農業高校出土銅剣
（九州考古学会 『九州考古学』
第41～第44号より）



写真3-22 鳥原市景華園遺跡出土の銅矛
（長崎県教育委員会提供）

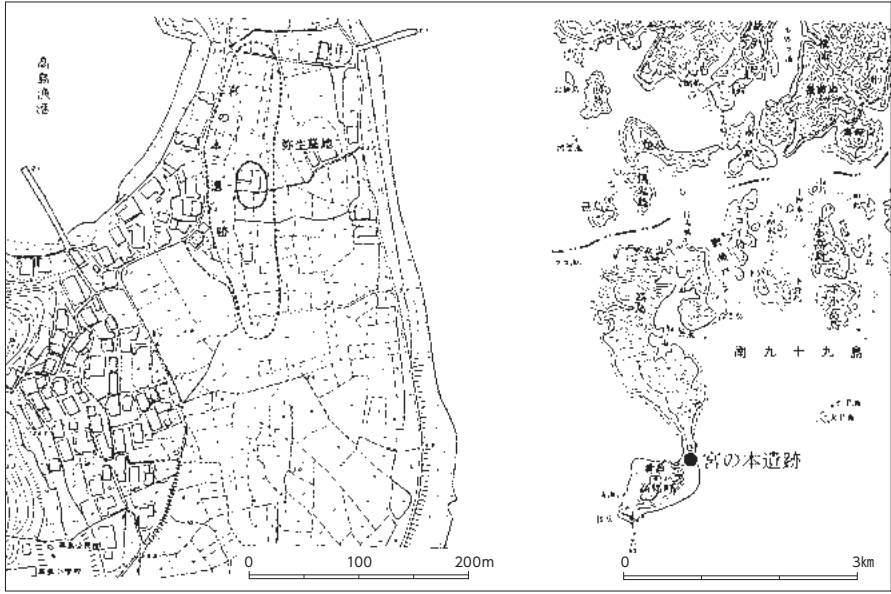


図3-14 宮の本遺跡位置図

(佐世保市教育委員会 『宮の本遺跡 緊急調査概報昭和54年度』より)

縄文時代晩期の黒川式期から弥生時代早期の山の寺式期、弥生前期末から中期前半の墓地群が発見されている。住居跡など生活に関する遺構は発見されていない(図3-14)。

縄文時代晩期の黒川式期の土器が顕著で、浅鉢、深鉢などの精製土器と粗製土器が出土(図3-15、3-16)した。後続する弥生時代早期の山の寺式期の刻目突帯文土器や組織痕土器、石器では扁平打製石斧、鍬石、石錘、骨角器研磨用砥石、石鎌、石剣、磨製石斧などが出土(図3-17)した。このほか山の寺式期と考えられる土壙墓が一基発見され、仰臥屈肢葬の熟年男性の骨が出土した。

その後、遺跡は断絶し、弥生時代前期末から中期前半の墓地が形成される。注目される石棺墓は四種類の形態があり、前期末の石棺墓群は伸展葬で、墓域も他の墓地と異なり、一群のものとして捉えられる。熟年女性の人骨が残っていた三号石棺は長軸が一六〇センチメートルと長く、左手首に南海産イモ貝を輪切りにした貝輪を装着していた。

中期初頭から前半期の石棺墓は、形態から四つに分けられているが、B・Dタイプは同一の範疇で捉えることが可能である。また甕棺墓、土壙墓は石棺墓と分布領域が同じで、石棺墓との共存が考えられる(図3-18)。



図3-15 宮の本遺跡出土土器(上段:前期末、下段:中期初頭~前半)

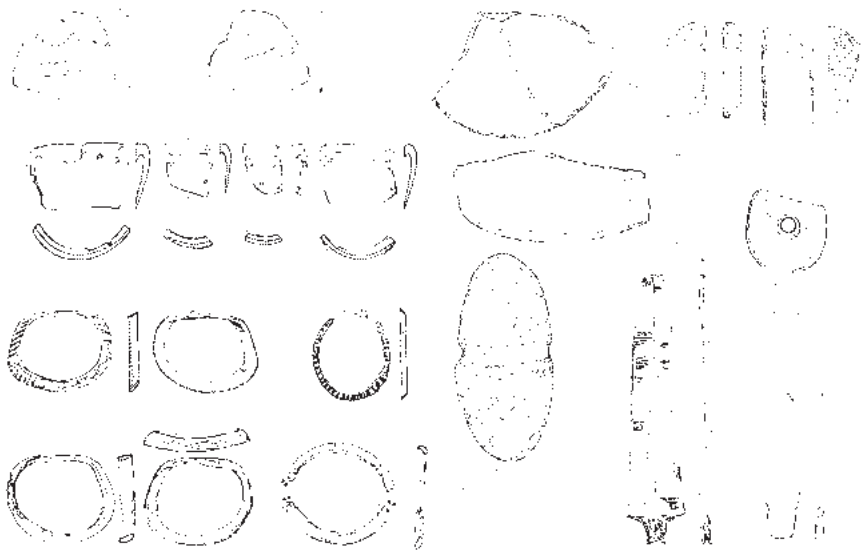


図3-16 宮の本遺跡出土 貝製品・石器

(図3-15・16 佐世保市教育委員会 「宮の本遺跡 緊急調査概報昭和54年度」より)

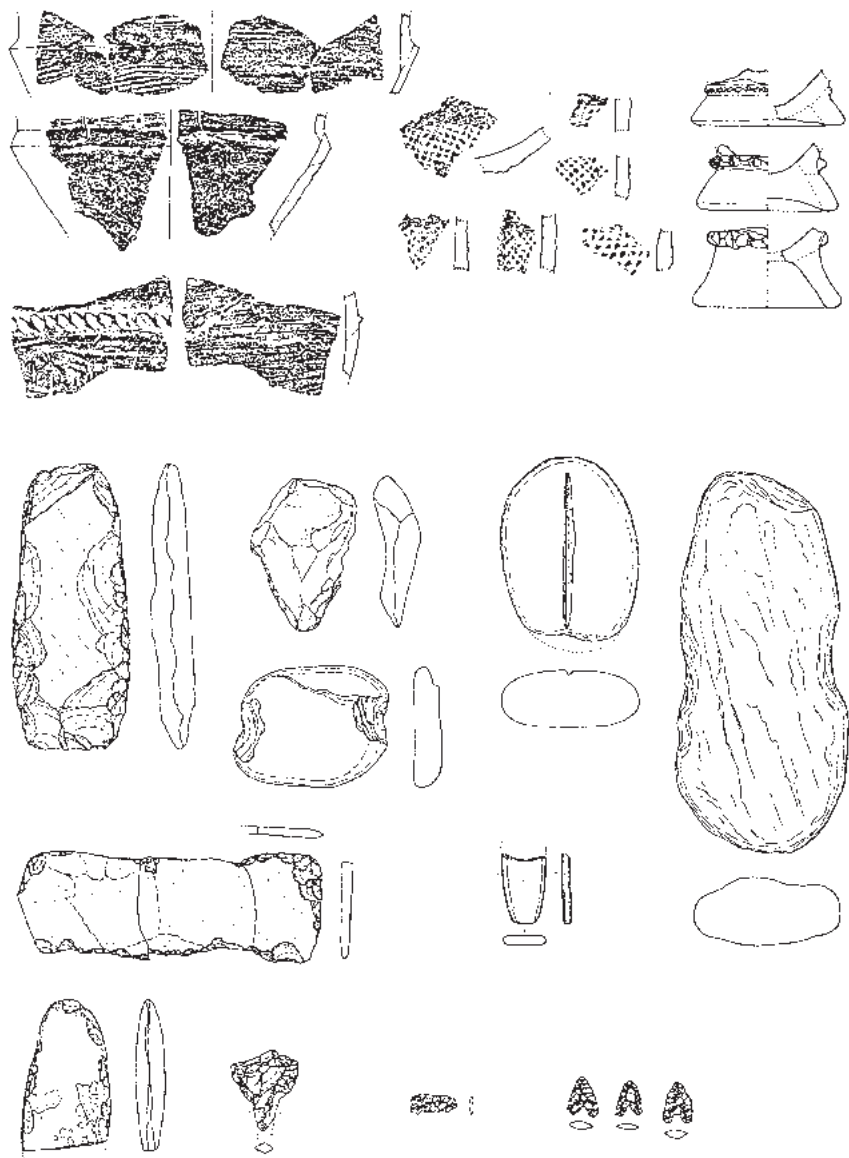


図3-17 宮の本遺跡出土弥生早期の土器・石器

(佐世保市教育委員会 『宮の本遺跡 緊急調査概報昭和54年度』より)

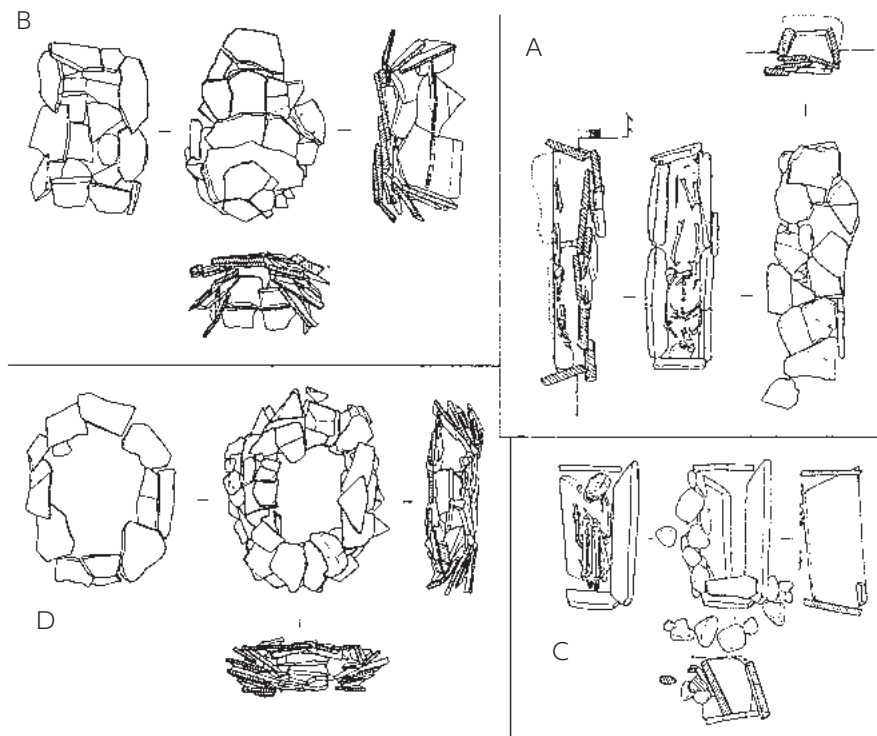


図3-18 宮の本遺跡の石棺墓の形態 (佐世保市教育委員会「宮の本遺跡 緊急調査概報昭和54年度」より)

問題となるのは前期末の伸展葬の石棺墓群で、この地域に伝統的な屈肢葬ではない。伸展葬の墓地は山口県の土井が浜遺跡にあり、時代的にも近く、貝輪を持つことなどから、海民的で、交易を担い、広範囲に展開する集団ではなかっただろうか。

■二・四反田遺跡⑬

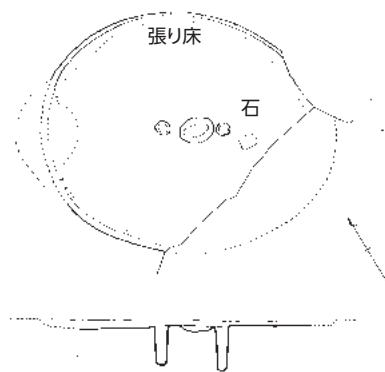
相浦川の旧河口近く、標高は一五〇メートルの水田地帯にある。周辺には縄文時代からの遺跡も多く、また中世には松浦宗家の居城となった竹辺城がある。道路工事による調査で、全容が解明されていないが、多数の竪穴式住居跡が発見されており、地域の拠点的な集落と考えてよい。

遺跡は弥生時代早期末に始まり、中期初頭に終わる。遺構について次の時代区分が示されている。

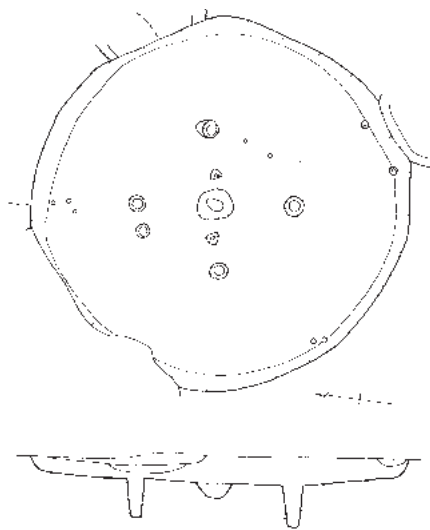
〔第一期〕早期末

竪穴式住居一棟、石囲土塋

〔第二期〕前期後半(古期) 支石墓一、石



8号住居跡



19号住居跡

図3-19 四反田遺跡の松菊里型住居跡 (佐世保市教育委員会 『四反田遺跡発掘調査報告書 平成5年度』より)

棺墓一、埋め甕一

〔第二期〕前期後半(新期) 竪穴式住居二〇棟、貯蔵穴、作業竪穴、屋外炉、小児甕、棺墓

六

〔第四期〕中期初頭 水田、水路

前期後半とされる竪穴式住居の中には、朝鮮半島に起源を持つといわれる「松菊里型竪穴住居」も検出されており、対外交流の側面から注目される(図3-19)。

早期末の遺物は、刻目突帯文期の一括土器群が出土し、甕、精製・粗製の鉢、壺、粗製深鉢からなる。また網状の籠の跡が土器の表面に残る組織痕土器も出土している。石器には、扁平片刃石斧、石鏃、石匙、磨石、石皿、凸石、叩き石などがある(図3-20)。

前期後半と一括された土器の中には、前期前半まで遡ると思われる土器も含まれている。また前期後半の時期には朝鮮系無文土器も僅かながら含まれる。甕棺は報告ではすべて小児棺としているが、器高が七〇センチメートルを超えるものと四〇センチメートルを下る物があり(図3-21)、成人と小児に分けられるのではないだろうか。

石器には石槍、石鏃、柱状片刃石斧、挟り入り片刃石斧、

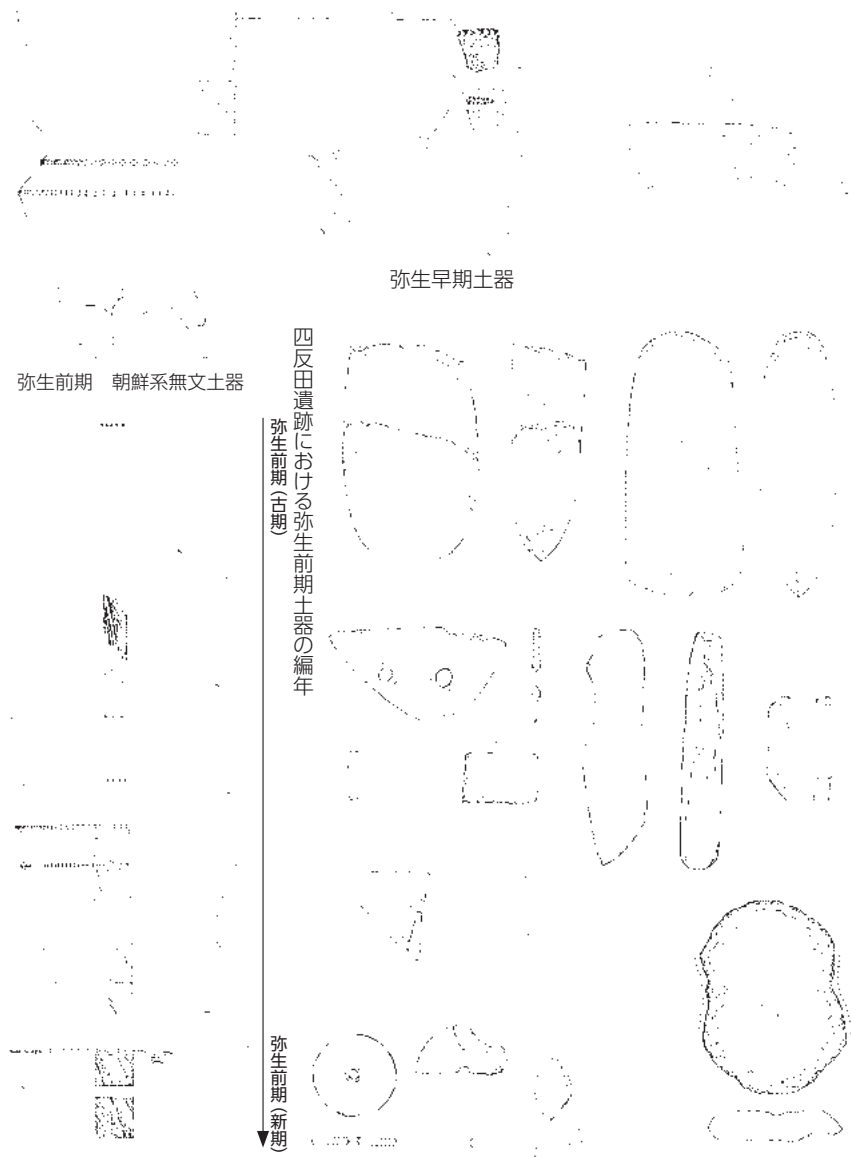


図3-20 四反田遺跡出土の土器と石器(弥生早期～前期)

(佐世保市教育委員会 『四反田遺跡発掘調査報告書 平成5年度』より)

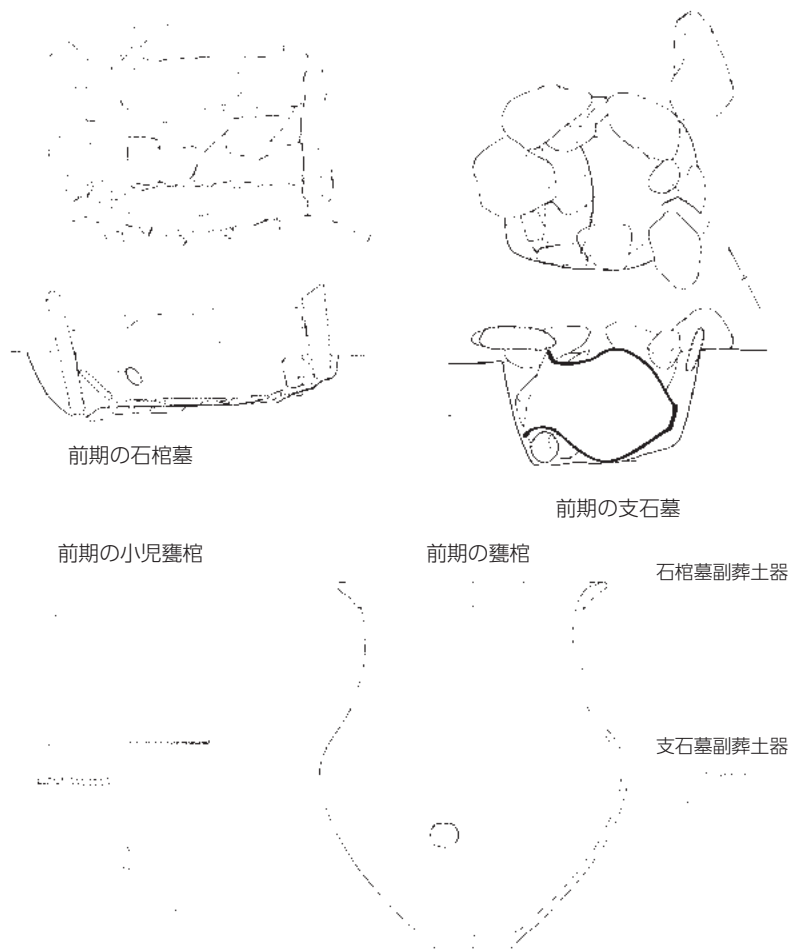


図3-21 四反田遺跡前期石棺墓と支石墓並びに甕棺と供献土器

(佐世保市教育委員会 「四反田遺跡発掘調査報告書 平成5年度」より)

蛤刃石斧、石包丁、紡錘車、砥石、磨り臼などがある。石包丁には三角形をしたものが複数あり、これらは初期の石包丁の特徴を備えており、やや古い段階のものかもしれない。また石斧の中には福岡市今山の玄武岩製磨製石斧が含まれており、北部九州弥生文化圏の影響を受けた遺跡であることが分かる。

■三、門前遺跡⑭

遺跡は相浦川の旧河口近く、四反田遺跡より下流、標高約八メートルの水田地帯にあり、縄文時代晩期のドングリ貯蔵穴が数基確認されている。

弥生時代の主な遺構として、放射性炭素年代測定により弥生時代早期から後期にわたる「木組遺構」が四四基発見されており、その性格について報告書では「木棺墓」又は「堅果類の水さらし場や貯蔵施設等の水利施設のどちらか」としている。人為的な木組み遺構ではあるが、その評価については今後の調査と類例を待ちたい。

弥生時代終末期と考えられる方形の竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、箱式石棺墓が検出されている。

出土遺物の特徴として、報告書では「中九州系土器」とされている台付甕が出土しており、現在のところ長崎県本土部における分布の北限である。

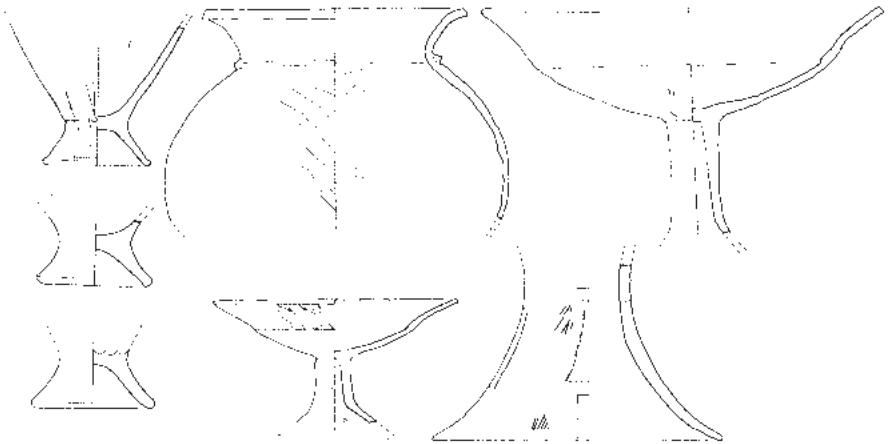


図3-22 門前遺跡出土の土器

(長崎県教育委員会 長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書第4集より)

また中九州系の透かし入り器台も多く出土し、北部九州系と中九州系土器の両者が出土することから、中継地としての機能を持った遺跡ではないかと考えられている(図3-22)。

註

- (1) 土肥利男著『多良山麓研究』一九六五
黒丸・沖田町にかけて、田圃の区画が正方形であることから、条里跡であることを発表された。
 - (2) 発見は昭和五十五年で、その後、遺跡範囲確認調査が昭和六十一年度まで行われた。さらに開発行為による調査がたびたび行われている。範囲確認調査の報告は、大村市教育委員会「富の原 大村市富の原1-2丁目」に所在する遺跡群の範囲確認調査「大村市文化財調査報告書第12集 一九八七」に詳しい。その後も、各種開発に伴い、大村市教育委員会によって調査が行われている。
 - (3) 甕棺墓と石棺墓の共存に関しては古くから知られていたが、甕棺墓は小児に限定されており、成人の甕棺墓と石棺墓の共存が意識的に確かめられたことはなかった。異なる墓制が共存することが分かった事は、長崎県地方の文化を考えるうえで画期的な発見となった。
 - (4) 前掲註(2)の書
 - (5) 大村市教育委員会「冷泉遺跡」黒丸遺跡ほか発掘調査概報<0>③「大村市文化財調査報告書第25集 二〇〇三」
 - (6) 東彼杵町教育委員会「白井川遺跡 彼杵中央地区圃場整備事業にかかる調査」東彼杵町文化財調査報告書第3集 一九八九
 - (7) 東彼杵町教育委員会「白井川遺跡(Ⅱ)」東彼杵町文化財調査報告書第4集 一九九〇
 - (8) 稗田遺跡調査会「稗田遺跡 弥勒寺地区農業構造改善事業にかかる遺跡の発掘調査報告書」一九八八
 - (9) 川道 寛「化屋大島遺跡」『多良見町郷土誌』多良見町教育委員会 一九九五
 - (10) 諫早市教育委員会「林ノ辻遺跡」諫早市文化財報告書第4集 一九八三
 - (11) 正林 護「諫早市出土の銅剣」九州考古学 第41号〜第44号 九州考古学会 一九七一
 - (12) 小田富士雄「島原半島景華園の遺物」『考古学雑誌』第45巻第3号 日本考古学会 一九五九
 - (13) 佐世保市教育委員会「宮の本遺跡緊急調査概報 昭和54年度」一九八〇
 - (14) 佐世保市教育委員会「四反田遺跡発掘調査報告書 平成5年度」佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書 一九九四
- 長崎県教育委員会「門前遺跡Ⅱ 一般国道497号佐々佐世保道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ」長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書第4集 二〇〇八

第三節 各時代の様相

◀ 稲作が始まった頃 弥生時代早期の様相

郡川河口左岸の低湿地帯周辺に広がる黒丸遺跡では、縄文時代晩期の黒川式期に定住化が進み、遺跡が拡大したことが複数の墓地の存在や扁平打製石斧と呼ばれる大量の土掘り具の出土から分かる。

水稲栽培という新たな食糧生産形態への移行のため、人々が低湿地帯に降りてきたことが背景にあったと思われるが、その中でも舟状木製品^{フナバネ}の存在はその生業をうかがう上で極めて重要である。国内では類例の出土事例がないが、湿地帯で収穫物などを運ぶための「田舟」、あるいは人がひざを突いて動かす「湯スキー」的な機能が考えられ、低湿地における運搬若しくは移動用の道具の可能性が高いものである。最も初期の水稲耕作は低湿地帯で行われたと推察されるが、その時に使用されたものとするれば、黒川式期まで水稲耕作の時期が更に遡ることが予想されるが、注視する必要がある。

それに続く山の寺式期、原山式期には、黒丸遺跡では定住化が進み、水田跡はまだ発見されていないが、水稲耕作が始まる弥生時代早期の遺跡と位置づけたい。

この時期の遺物としては、「刻目突帯文系土器」といわれる山の寺式、原山式土器とともに、扁平打製石斧や、石鏃、網の錘^{おこし}など、石製の生産道具が多く出土することから、農耕とともに漁労あるいは狩猟が行われていたことが分かる。

一方で、風観岳支石墓群のように山間部に展開する遺跡が存在する。集落の場所とその内容など明確ではないが、恐らく近辺にあったものと思われる、その生業が問題となる。陸稲やソバ、ムギ、アワなどの植物の栽培などが考えられ、そのほかに植物採取や狩猟など複合的な生産によって成り立っていたものと思われるが、以後、遺跡は消滅する。

この時期は大陸の人の移動に伴い、西北九州、北部九州の沿岸部を中心に水稲耕作が始まり弥生時代を迎えるが、一方で大陸系の支石墓は平戸市田平の里田原遺跡のように水田地帯にも存在するが、特に西北九州一帯の山間部に多く所在する。このことから日本に影響を及ぼした大陸系文化は当初から一様ではなかったと見ておくべきであろうし、漁労や舟を使っ

た交易などにも変化があったものと思われる。

二 定着する弥生文化 弥生時代前期前半の様相

黒丸遺跡から僅かながら出土している如意型口縁を持つ板付式系の土器片の存在によって分かるが、これまで長崎県地方の遺跡からは、当該期の遺構と遺物はごく一部の遺跡を除いてほとんど確認されていない。

このことから、その時代には長崎県地方に人は住んでいなかったのではないかと、極端な考えが芽生えるが、それに先行する弥生早期や縄文晩期には遺跡が盛行していることから、この時期だけ人が住まないということは考えがたい。むしろ板付Ⅰ式と呼ばれる土器群が福岡市一带を中心とした地域性の強い土器であり、長崎県を含むそのほかの地域では弥生時代早期からつながらる刻目突帯文土器が主であるため、今後、刻目突帯文土器の型式の細分化が進み、それに伴う石器などの組成とともに、編年が明らかになっていけば、この問題は氷解していくものと理解したほうが良いだろう。

この時期の遺物として、黒丸遺跡では朝鮮半島の石包丁に見られる擦切り技法によって穴が開けられた石包丁、抉りのある柱状石斧など大陸系の石器が発見されており、これらを早期とみるか前期前半とみるか解決しなければならない問題があるが、今後の類例の増加を待つこととしたい。

三 拡大する弥生社会 弥生時代前期後半の様相

前期後半を迎える頃、九州各地では独自の弥生社会が形成される。大村湾沿岸地域の弥生社会もこの時期を境にして活発化し始める。この背景には、大陸文化の影響で成立した弥生社会が一定の成熟を迎え、拡大しながら定着していく時代と捉えることができよう。主な遺跡としては黒丸遺跡、稗田遺跡、佐世保市の宮の本遺跡などが挙げられる。

鳥に所在する宮の本遺跡に見られる大型の甕棺に使用された甕は、北部九州地域の土器の特徴を持っており、遺跡の立

地から見て、海上での交易を担う集団の墓地と考えたい。宮の本遺跡は在地型というより交流型で、地域に根ざした遺跡というより特殊な遺跡と捉えたほうが良いだろう。こうした遺跡の存在は、交易・交流が活発化している弥生時代前期後半の様子を如実に示すものとして注目される。

一方、黒丸遺跡は大村湾沿岸最大の水田適地を背景に発展し、同じく稗田遺跡も水田地帯に隣接して立地し発展する。この時代から一帯では遺跡数が増加し、水稲耕作が本格化していく時代と捉えることができよう。

四 活発化する弥生社会 弥生時代中期前半の様相

中期になると遺跡は更に増加し、富の原遺跡のような大集落が出現する。黒丸遺跡でも中期前半から中頃の甕棺墓が出土している。

富の原遺跡では、中期初頭の土器が海岸部近くに多く出土する。このことから初期の集落は、海岸部に近い位置に形成されたものと思われる。

B地点墓地の中に中型の甕棺墓があり、成人甕棺墓と考えてよいだろう。この甕棺の中には表面を黒く塗られたものがあり、同様のものは北部九州の甕棺に多く見ることができる。また甕棺を埋葬する時の角度もほぼ一致することから、北部九州地域の葬送儀礼の強い影響の元に成立していると思われる。更に石棺墓との共存もこのあたりから始まったと考えられ、この時期から、富の原遺跡における集落の拡大が図られていく。

五 環濠集落の出現 弥生時代中期中頃の様相

続いて、富の原遺跡ではこの時期に広大な環濠集落が出現する。環濠は数条確認されており、それらが掘られた時期の前後関係については不明な点も多いが、最も人口が増えた時期と見てよいだろう。

また環濠を持つ集落は、地域の拠点集落と考えられており、富の原遺跡の繁栄を示す時代と見ることができよう。富の

原遺跡の環濠は中期中頃の早い時期に掘られ、中期後半頃にはほぼ埋められていることが分かっている。

また環濠の内側には竪穴式住居と、隣接して複数の掘立柱の建物群が確認されている(図3-23)。

掘立柱の建物については、倉庫や集会場、共同作業場、祭殿などがあるといわれているが、富の原遺跡の掘立柱建物群は、その性格までは分かっておらず、住居に付随する倉庫群と位置づけられている。また、収納物に関しては食糧以外の選択肢も含めて考慮すべきであろうとしている。

六 玄界灘地域とのつながり 弥生時代中期末～後期前半の様相

この時期の、大村湾地域の活動の特徴を最も良く現しているのが富の原遺跡である。成人甕棺墓から副葬品として出土した三本の鉄戈と一本の鉄剣の出土は、この遺跡と北部九州地域との密接なつながりを物語っている。

現在までに鉄戈、鉄剣の発見例は合わせて五〇例近くあるが、そのうちの四本が富の原遺跡から出土している。その多くは北部九州地域に集中しており、このことから北部九州文化圏と密接な関係を持つことが分かるのであるが、富の原遺跡の墓地に見られる祭祀土器の特徴が、福岡県の中期末後半から末の糸島半島を中心とする糸島型祭祀土器の特徴を持っており、この時期には玄界灘側の地域との関係性が非常に強かったことをうかがわせている。

富の原遺跡の鉄戈・鉄剣は、いずれも北部九州系の特徴を持つ大型甕棺墓からの出土で、その土器の胎土には金雲母が含まれている。このことから当地で焼かれたものではなく持ち込まれたものと考えられ、また大型甕棺墓と丹塗祭祀土器はセット関係であることから、合わせて玄界灘地域との深いつながりを指摘することができよう。

甕棺墓と石棺墓の関係については、先に共存することを述べたが、特に甕棺墓の被葬者の人骨の形質学的特徴が問題となった。北部九州系と西北九州系の人骨には民族的特徴があることが指摘されており①、高顔・高身長と低顔・低身長の特徴をそれぞれ持ち、富の原遺跡の北部九州系の墓制である成人甕棺墓の中で、取り分け鉄製品を副葬品として持つ被葬者は、どちらの形質的特徴を持った人物であるかが問題となっていた。それは、富の原遺跡が北部九州地域のコロニー的性格

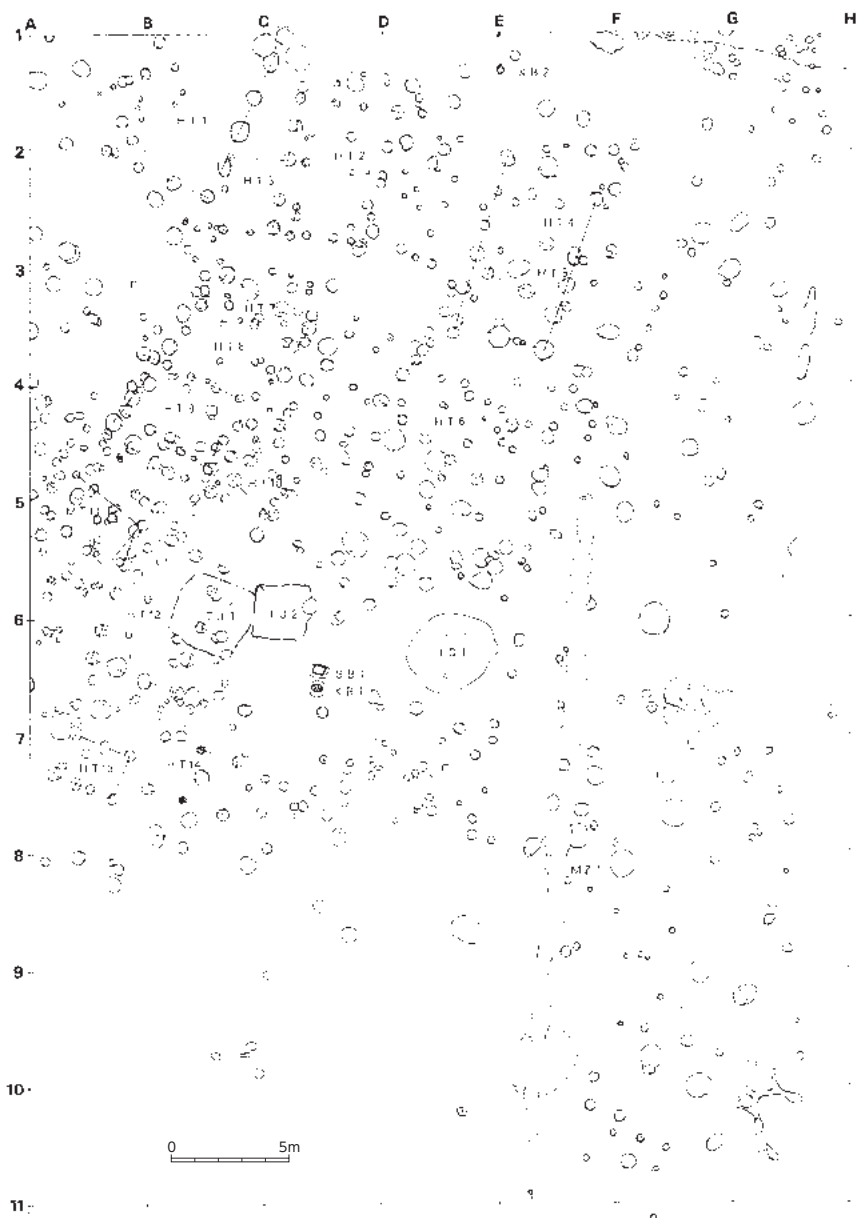


図3-23 富の原遺跡掘立て柱建物群

(大村市教育委員会 大村市文化財調査報告書第21集より)

を持つのかどうかということも併せて考えられていた。

B地点墓地の二〇号成人甕棺墓から形状をとどめた人骨が出土し、調査の結果、松下孝之らの観察によれば、四肢骨には縄文人の特徴が強いことが報告された²⁾。

また甕棺墓の中からは三体の人骨が出土し、熟年男性一体、壮年女性二体とされた。甕棺葬における同様の事例は、唐津市の大友遺跡でも確認されており、北部九州で普遍的に見られる一棺一葬とは異なる葬送のあり方が判明している。

以上のことから、北部九州人を主体とする集団によって成立した遺跡とは考えがたく、玄界灘沿岸地域との深い交流を背景に、在地系の人々が主体となり成立した集落だったのではないかと考えられている。北部九州人が遺跡内にいなかったのか、その介在が全くなかったのかは、なお今後の課題とするところである。

鉄器を副葬した甕棺墓は、中期末から後期初頭に位置づけられるが、遺跡からは後期前半の土器が僅かに認められるが、この時期を最後に富の原遺跡の集落は消滅する。

一方、水田地帯に成立した黒丸遺跡や冷泉遺跡、岩名遺跡、東彼杵町の白井川遺跡は、それに続く時代にも盛行することから、ここでも富の原遺跡の特殊性が浮かび上がる。

七 透かし入り器台の出現と葬制の変化 後期後半から終末期の様相

この時期、透かし入り器台が盛行し始める。その分布は、肥後地方を含む環有明海一帯から大村湾沿岸地域、佐世保市相浦川周辺、更には唐津、糸島半島の玄界灘沿岸地域に広がりを見せる。一方で、糸島型の丹塗祭祀土器は後期初頭あたりを最後に消滅する。

また墓制にも変化が現われる。甕棺墓は消滅に向かい、石棺墓は大型化し前代の屈肢葬から伸展葬に変化し、葬送、祭祀に係る行為に大きな変化が表れる。

特に透かし入り器台は祭祀に係わる土器と考えられ、それゆえ、この変化の原因とその背景については、政治、経済、文

化のレベルのなかで、いずれかに大きな変化があったものと思われるが、邪馬台国の胎動期で、国家形成の時期に当たる古墳時代への重要な過渡期である。

この時代の遺跡としては大村市の黒丸遺跡、冷泉遺跡、稗田遺跡、東彼杵町の白井川遺跡、佐世保市の門前遺跡などがある。

註

(1) 長崎大学教授内藤芳篤によつて、形質人類学的に縄文人の系譜をひく西北九州型の存在が明らかにされた。

(2) 松下孝幸・分部哲秋・中谷昭二大村市富の原遺跡出土の弥生時代人骨『富の原 大村市富の原1・2丁目』に所在する遺跡群の範囲確認調査『大村市文化財調査報告書第12集 大村市教育委員会 一九八七』

第四節 弥生時代と大村湾文化の成立

一 異なる土器文化の共存

土器に関して、器形の特徴から大きく分けて二つの系統の土器が共存することが分かった。在地系で環有明海地域に類縁関係を求めることができる台付甕を中心とする土器群と、北部九州系の平底の土器群の二種類である(図3-24)。

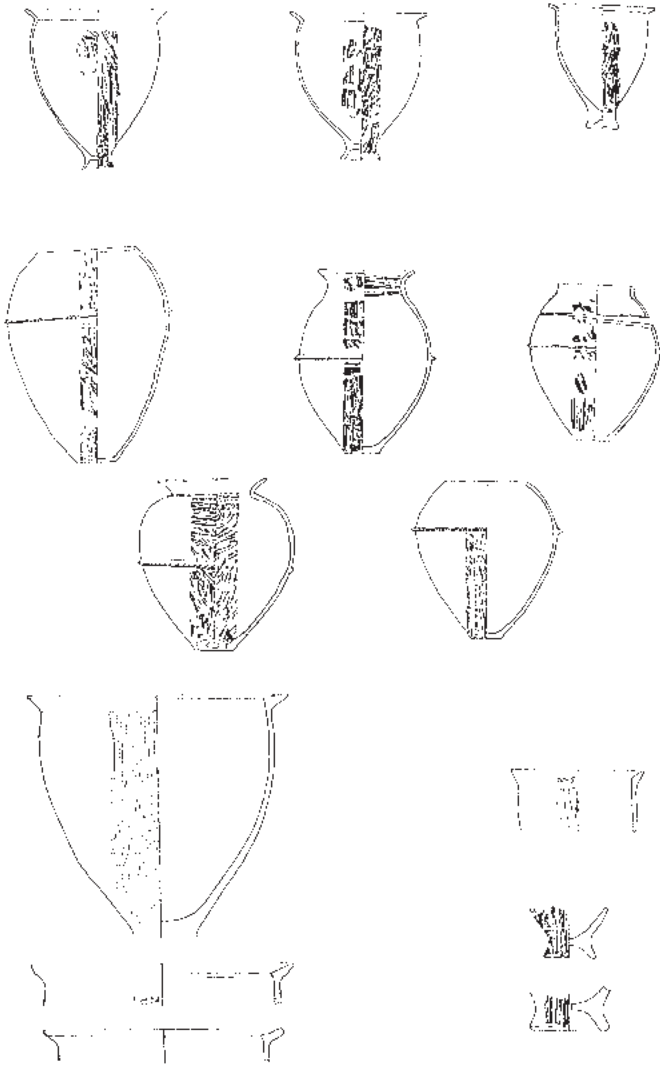
台付甕の分布範囲は、熊本県、鹿児島県、佐賀県の南部、長崎県では島原半島、大村湾一円、長崎市から西彼杵半島、そして北は佐世保市の相浦川周辺に僅かながら広がっている。そこから北の平戸、松浦、伊万里、唐津方面では北部九州系の土器の分布域になっている。

このことから、台付甕の分布域は佐賀県北部、筑後川流域の福岡県を除く有明海一帯となり、海上交通を利用した地域が形成されていることが分かる。

成人甕棺に使われる甕は北部九州系の甕で、祭祀土器も福岡の糸島型といわれる土器の特徴を持っているが、北部九州系の土器は住居跡からも出土することから、祭祀行為にのみ北部九州系土器が使われたのではなく、日常用としても使わ

れていることが分かり、頻繁な交流があったことがわらせている。

土器の胎土にも違いが認められ、在地系土器には黒いガラス質の角閃石が入り、北部九州系土器には金雲母が入るとい特徴がある。大村扇状地一帯には金雲母は産出されないことから、後者の土器が北部九州を含む他の地域から持ち込まれたことが分かる。



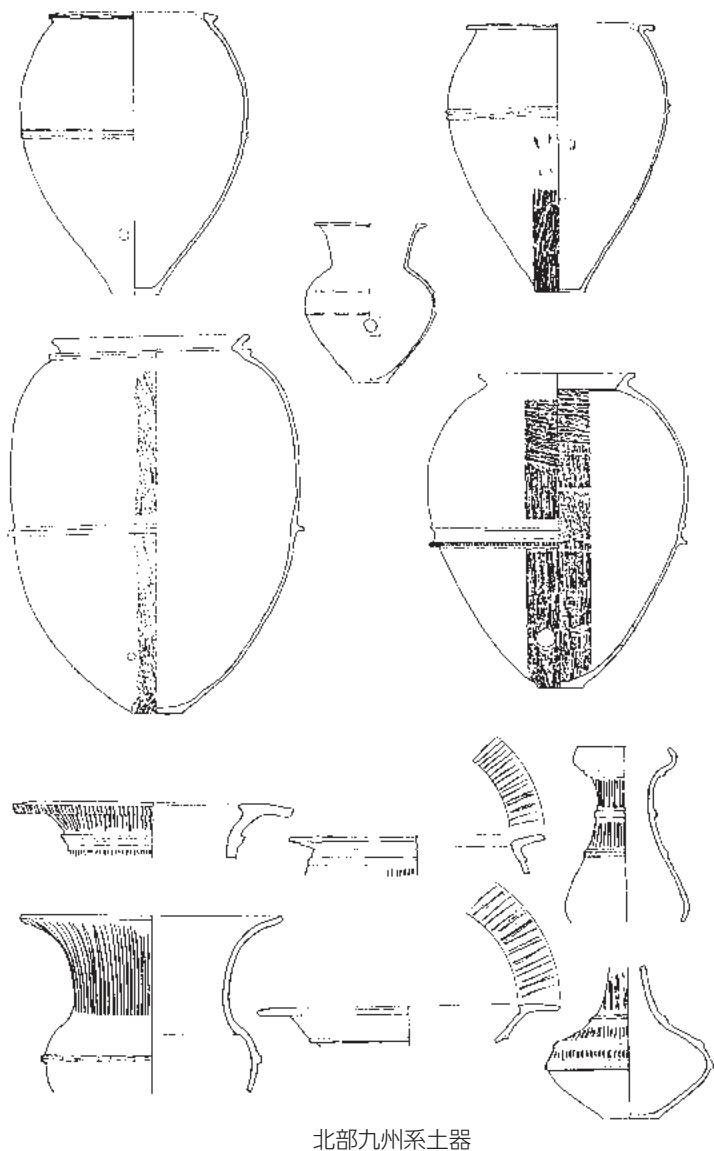
在地系土器

(大村市教育委員会 大村市文化財調査報告書第12集より)

二 水上交通の発達と大村文化

離島半島を多く抱え持ち、平野に乏しい長崎県地方の文化とその経済は、前時代の縄文文化のあり方を踏襲しつつ、

土器全体では、在地系と北部九州系の土器では在地系の量が勝っており、二つの異なる系統の甕を使った合せ口甕棺の例があり、生活レベルで両者が使われていることが分かる良い事例である。



北部九州系土器

図3-24 共存する二つの異なる土器群(富の原遺跡出土の土器)

海と密接につながりながら広がっていることが分かる。

海との関わりは、単に海産物という食糧の確保に留まらず、海を伝った交流による経済活動と密接に関係付けられる。縄文時代においては、諫早市の伊木力遺跡から出土した縄文時代前期の丸木舟に代表されるように、約六〇〇〇年前から舟が重要な役割を果たしていたことが分かる。瀬戸内系の土器が流入していることから、遠隔地との交流が既にあったことが証明できるのであるが、大村湾沿岸地域を見ると、大陸からの人の移動を背景にした水稲耕作の出現が当初は水田が作りやすい海岸部近くの低湿地から、次第に内陸部に広がっていく様子を黒丸遺跡の調査から垣間見ることが出来る。

弥生時代は、水田を中心とした農耕の発達と、それに伴う集団と集落の形成を原動力にしつつ、クニの形成とともに地域が形作られて行く時代であるが、大村湾沿岸地域の遺跡のあり方を眺めると、単に農耕や漁労に加え、海上交通を媒体として広域的につながった地域形成の様相とそこで生きた人々の姿が浮かび上がる。

大村湾岸最大の郡川河口左岸の低湿地帯を中心に広がる黒丸遺跡は、初期水稲農耕の可能性を秘めつつ、縄文晩期に始まり古墳時代へと続いていく大集落として発展する。

これと対照的なのが富の原遺跡で、水稲耕作が不向きな場所に、弥生中期初頭から定住が始まり、中期には急速に発展し環濠を持った拠点集落となった。更に中期末～後期初頭には鉄戈、鉄剣及び福岡県糸島地方の祭祀土器に代表される交流拠点としての性格が強く現れ、後期前半を境にして忽然と集落機能を無くし、それ以降の時代につながらない。ここに富の原遺跡の成立背景の特殊性がうかがわれ、自然的理由よりも経済的あるいは政治的理由を想定することもできる。島に立地する佐世保市の宮の本遺跡は、前期後半の甕棺墓に見られる北部九州地域の直射的影響が見られる一方、山口県の土井が浜遺跡などに代表される伸展葬の石棺墓が出土するなど、在地的性格というより、広域的な活動を行う集団の存在を示唆した遺跡として注目される。

また、佐世保市の相浦川下流域にある四反田遺跡のような拠点集落では、土器の面からは玄界灘沿岸地域からの強い影響を受けつつ、一方で、有明海から大村湾にかけて分布する台付甕の北限として大村湾地域との関係性が認められ、

また韓半島の影響を強く受けた松菊里型の竪穴式住居跡が多く確認されている。

一方、有明海側に目を転じれば、諫早市の諫早農業高校遺跡から出土した銅剣と甕棺墓群に注目が集まる。発見された年代が古く、十分な調査もなされないまま消滅したのは惜しいが、青銅製武器を副葬した例としては、本土部では島原市の景華園遺跡で複数の青銅製武器が出土しており、その評価を巡っては「コロニー的性格」と言われ、その特殊性が際立っているが、有明海を巡る拠点的な遺跡としての性格がクローズアップされる。

ところで大村湾は湖に例えられるように波静かで、諫早地峡を結節点として、水上交通による人・物資の移動を考える時、玄界灘地域と有明海地域を結ぶ地域として、双方の文化要素が墓地、土器などに顕著に認められる。言い換えれば、有明海地域の文化と、玄界灘沿岸地域の文化を結びつける役割を果たしていたのが大村湾の交通であったということが出来る。

従来、弥生文化は北部九州の沿岸地域で最初に定着し、九州全域に広がっていくイメージで語られることが多かったのだが、大陸系の支石墓は長崎県を中心にして西北九州に多く、これらは必ずしも水田地帯を背景にはしていない。むしろ大陸文化が最も初期に影響を及ぼした地域の一つとして、玄界灘一帯とともに長崎県地方が考えられてよいのではないだろうか。長崎県の地勢を考えた時、「離島半島振興法」に代表されるように、水稻を生産するための後背地に恵まれたとは言えず、それが福岡市などを中心とする玄界灘、北部九州一帯の弥生文化との発展の差を生み出す原因だったと思われる。

文化の波及に関しては、これまで同心円状に広がるとする陸上中心の考え方が主であったが、大村湾沿岸地域を含む長崎県地方の文化は、海上交通による広がりによるもので、面的広がりよりも点と点を結ぶような線の広がりが顕著である。

弥生後期前半から、糸島地域の影響と考えられる丹塗り祭祀土器が姿を消し、替わって肥後地方を含む有明海周辺に類縁関係を持つ祭器としての透かし入り器台が玄界灘沿岸部にも広がっていくが、その盛衰が地域を含む政治状況の変化あるいは経済など何に起因するものか、今後の研究課題であるとともに、後に続く古墳時代のあり方とも併せて、地域の変化を捉えていく必要がある。

(稲富裕和)